

文部省検定済教科書
財団法人 学校図書研究会編修

11
学図 小社602

社会科 六年

教育學部
資料室

あの国この国



学校図書株式会社

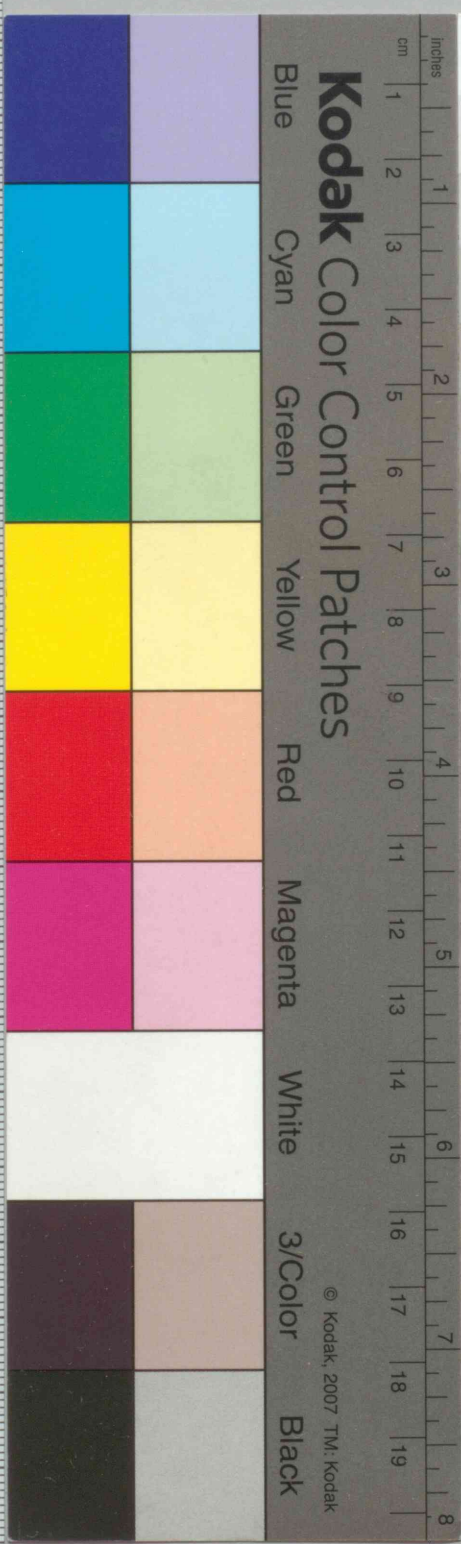
KD
G/16

教
32
013

60016

教科書文庫

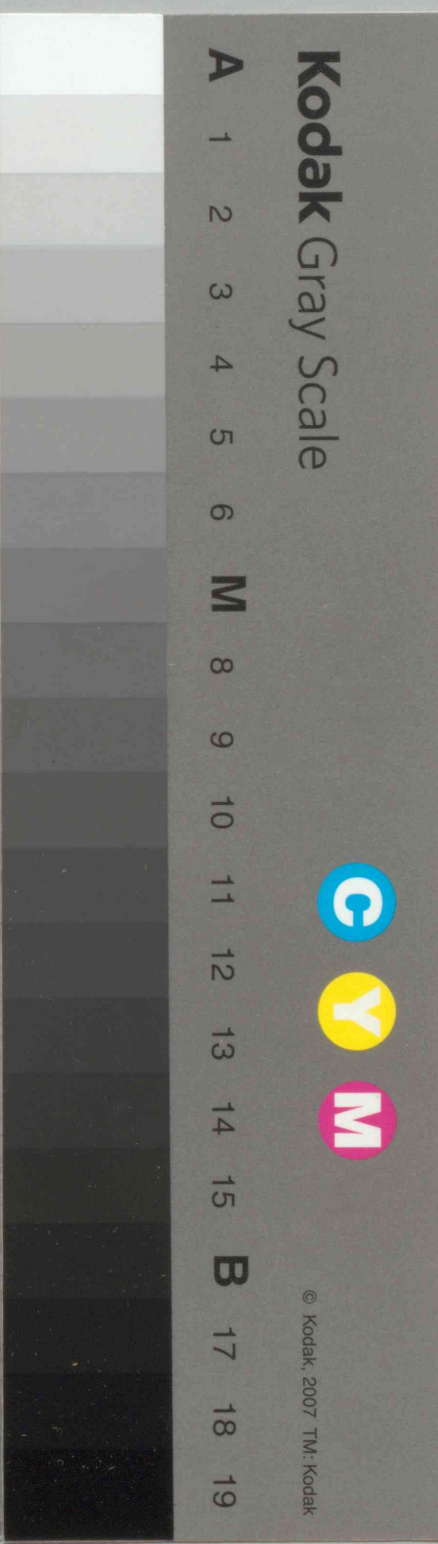
5
300
32-1950
0/304
49984



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

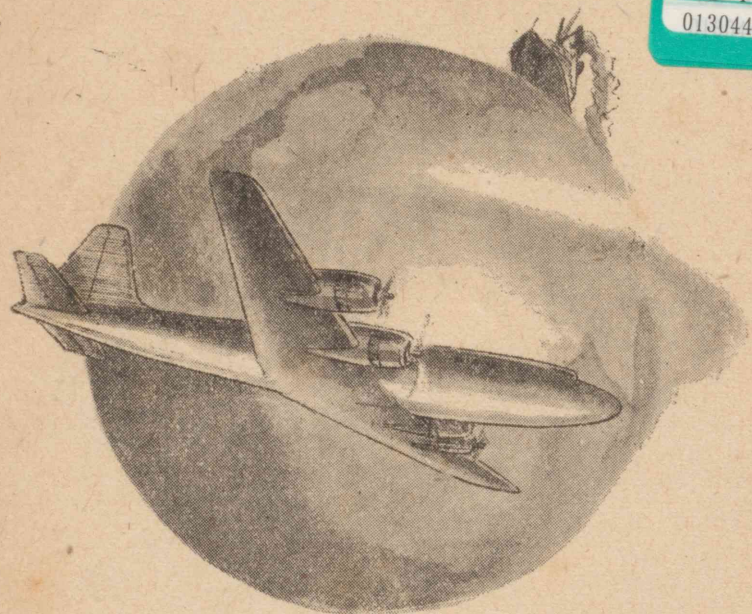


© Kodak, 2007 TM: Kodak



寄贈

中央図書館



教科書文庫
6
301
32-1950
0130449984

昭和二十五年

月

日 文 部 省 検 定 小 学 校 社 会 科 用

あの国この国

広島大学図書
0130449984



学校図書株式会社

広島大学
教育学部図書

広島大学図書
0130449984



もくじ

一 春雄の手紙……………四

(一) ニュースを聞いて……………四

(二) おじさんへの手紙……………九

二 はいる船でる船……………十二

(一) 賀 易 港……………十二

(二) 日本からの船……………二十一

(三) アメリカだより……………二十八

三 米をつくる国々……………五十

(一) 水田に働く人々……………五十

(二) 季 節 風……………六十一

(三) 暑い国の生活……………六十七

四 寒い地方の生活……………七十九

(一) 冬のおとずれ……………七十九

(二) 寒い土地の人々……………八十八

(三) さばくと草原……………百

五 木村さんの話……………百十一

(一) 木村さんの話……………百十一

(二) 春雄のまとめ……………百三十二

一 春雄の手紙

(一) ニュースを聞いて

ぎらぎらと照りつけていた太陽もしずみました。あたりはまだほんのりと明かるく、すずしい風にふうりんが鳴っています。

春雄^{はろお}くんの家は、おじいさんをはじめ、おとうさん、おかあさん、それに三年生のかず子さん、照雄さんの六人ぐらしです。いま、ちょうど、にぎやかな夕飯が終ったところで、かず子さんが、ことし二つになつた弟の照雄ちゃんをあやしています。

「照ちゃん、おじょうずおじょうず。ほら、ここまでよ。」

照雄ちゃんが、「キャツ、キャツ」といいながら、かず子さんのところまで歩いてきたので、みんな手をたたきました。

そのとき、ラジオが七時の時報を報じました。

「ニュースだね。少し聞こえがよくないようだ。春雄、

ちよつと見てごらん。」

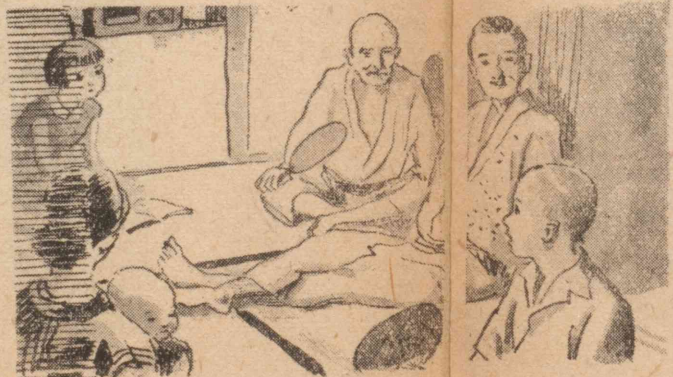
おとうさんがこういったので、春雄くんは立ちあがって、まどぎわのラジオの調節をはじめました。

アメリカやヨーロッパのニュースが報ぜられているようです。ニュースの報道が終るのを待っていた春雄くんは、はずんだ声でいきました。

「おとうさん、ニュースで思ひだしたんだけど、竹田くんのおとうさんね、こんどアメリカへいかれるんですって。」

「ほう。竹田さんなら、やはり英文学の研究にいかれるのだな。」

「ええ、そうですって。竹田くんは、あちらのめずらしい写真など送ってもらうんだと



いって、とてもよろこんでいましたよ。」

「そうだろうね。竹田さんのようなりっぱな方にうんとあちらで研究してもらうんだな。」

そのとき、かず子さんが

「アメリカへいくには、どの港から出発するの。」

と、たずねました。

春雄くんが、

「横浜だよ。ね、おとうさん。いつかニュース映画で船出の光景を見ましたよ。」

と、元気な声でいいました。

「それはいいニュースを見たね。船でいく人は、みんな横浜港から出発するようだな。」

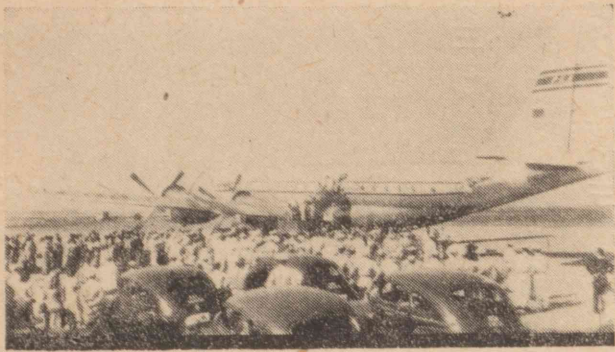
でも飛行機でいく人は、東京の羽田の空港から出発するんだよ。」

「あ、そうそう。そのとき、飛行機で羽田に帰ってきた人たちのニュースもでていましたよ。おとうさん、あの広い太平洋を飛行機で飛んでいくのは、すばらしいでしょうね。時間はどれくらいかかるのでしょうか。」

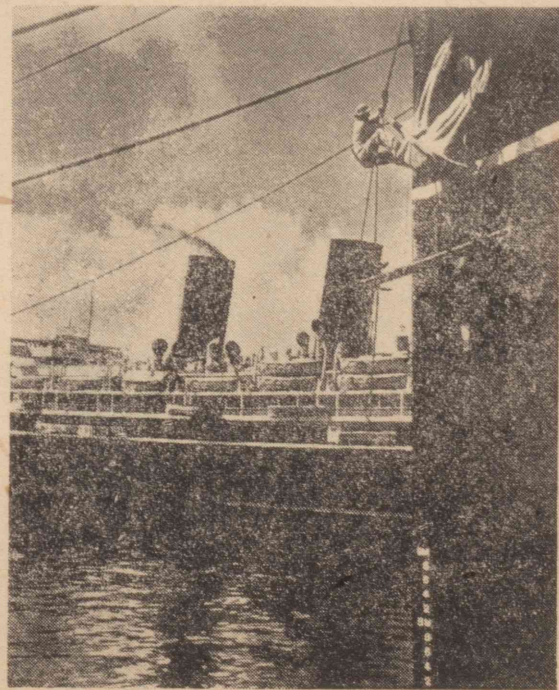
「そうだなあ、どれくらいかかるだろうね。そうそうこのあいだのラジオのニュースで、あちらへいった方が、

ダグラス機に乗って羽田を朝九時にたつと、あくる日の午後九時にはサンフランシスコに着いたといっていたから、三十六時間ぐらいかかることになるね。しかし、これは日本時間の午後九時で、あちらの時間にすると、午前一時だよ。」

おとさんの話を聞いて、考えていた春雄くんは、「このまえのニュース映画は、大きな客船が着いたとこ



羽田空港と旅客機



港

ろのようすでしたが、貨物船がはいったときも、波止場はにぎやかでしようね。」と、話しかけました。

おとうさんは、

「そうだろうよ。なんといっても貨物船は、たくさん荷物を積んで入港するからな。でも、おとうさんは、いったことがないので、よくわからないよ。」と、いいました。

そのとき、おかあさんが、

「陽三おじさんだったら、よく知っているのですがね。」

と、おとうさんを見ながらいいました。

「そうだね。陽三おじさんは、横浜の貿易会社につとめているのだから、よく知っているだろうよ。いちど、手紙をだしてたずねてみるといいだろう。それがいいよ、春雄。」
「そうですね。ぼく、さっそく手紙をだしますよ。」

春雄くんは、いかにもうれしそうにいいました。

(二) おじさんへの手紙

春雄くんは、そのばんつぎのような手紙を書きました。

おじさん、ずいぶん暑くなりましたね。おじさんは、あいかわらず元気でおつとめのことと思います。わたくしのうちは、おじいさんはじめ、おとうさんおかあさん、かず子もみんな元気です。そして、ぼくもたいへん元気で学校に通っています。

ところで、おじさん。今夜はおとうさんやおかあさんと、たいへんおもしろい話をしたのですよ。それは、ぼくの友だちの竹田くんのおとうさんが、アメリカへいかれる話から、横浜の港のことや、羽田の空港のことについて話しあったのです。ところが、それらの港のようすの話になると、だれもくわしくは知りません。みんなこまってしまいました。そのとき、おかあさんが、おじさんにたずねるとよくわかるでしようとおっしゃったのです。

それで、つぎのことをおたずねしたいのです。

1. 横浜の港には、どこの国の船がはいつたり、でたりするのでしょうか。また、積み荷や荷あげを、どんなにするのでしょうか。それから、その品物はどんなものでしょう。そんなことをくわしく知らせてください。

2. 羽田の空港で発着する飛行機にはどんなのがあるか、一日にどれくらいの飛行機が飛びだしたり着いたりするのか、教えてください。

この二つのことについて、お願いします。ご返事がきたら、おとうさんやおかあさんに読んであげることにしています。

では、おじさんお元気で。

さよなら

この手紙をだしてから五日目に、おじさんから返事がとどきました。それには、おじさんが会社の用事でそちらへ出張するので、土曜日の夕方たちよることになっていると書いてありました。

おじさんがとつぜんくることがわかって、おじいさんをはじめ、家中の者がたいへんよろこびました。なかでも、春雄くんはとびあがってよろこびました。

学習の手びき

一、このごろ、わが国へは、どんな品物がどこの国から輸入されているでしょうか。また、わが国からは、どんな品物を、どこの国へ積みだしているでしょうか。こんなことについて調べ、表にまとめてごらんください。

二、世界各地のおもな港について調べ、その輸出入品や航路などを地図に書きいれてまとめてごらんください。

三、世界の国々の間では、学問や美術の研究や、いろいろの施設を視察するため、たくさんの人々がいきましていますね。こうして、世界の国々は、それぞれ他国のすぐれたところを研究して、自分の国の繁栄をはかっているのです。このようなことについて、いろいろな点から調べて話しあいましょう。

四、わが国では、一年にどれくらいの食料が必要なのでしょうか。不足している食料の問題を解決するには、どんなことが考えられるでしょうか。いろいろな点から調べてごらんください。

二 ばいる船でる船

(一) 貿 易 港

まっていた土曜日、春雄くんはいそいで学校から帰りました。

夕方ごろ、おじさんが着きました。春雄くんは、もちろん、みんなが大よろこびでむかえました。

にぎやかな夕飯がすむと、さっそく春雄くんは、

「おじさん、横浜港にはアメリカの大きな船がはいたり、でたりしているのでしょう。」と、話しかけました。

あとかたづけをしていたおかあさんが、

「春雄さん、そんなにおじさんをせかしてはいけませんよ。」

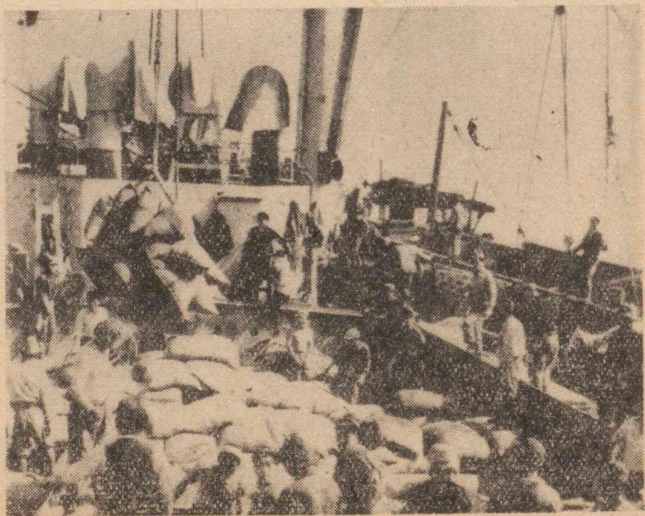
と、たしなめました。

「まあ、いいですよ。こんなにいっしょうけんめいになっているのですからね。」

おじさんは、にこにこしながらいきました。「そうだねえ、いろいろな国の船がはいつてくるよ。そのなかでも、アメリカの船がいちばん多いけれどね。ねずみ色の大きな客船や黒味がかつた貨物船が、よく波止場に横づけになっているよ。」

「あちらへいく人たちは、そんな客船に乗るのですね。」

「そうそう、それにもちろん、アメリカやほかの国々から日本をおとずれる人や、帰っていく人たちも乗るわけだね。」



貨物船の外米陸あげ

この話を聞いた春雄くんは、竹田くんのおとうさんも、こんな船でアメリカにわたったのだなと思いました。

しばらく考えていた春雄くんは、続いてたずねました。

「その貨物船には、どんな物を積んでくるのですか。」

「そうだな、やはり食料品や綿花などがいちばん多いだろう。そのほか石油もあるがね。と、おじさんがこたえました。」

「そんな貨物船がはいつてくると、港はにぎやかになるわけですね。」

「そうそう。とにかくたくさんの荷物が陸あげされるのだから、にぎやかなものだ。大きな起重機がたえまなく動いてね、船の中の荷物をつぎつぎと荷あげ場におろすのだよ。すると、長いさん橋では、これを電気で運転している三輪車に乗せて、どんどん倉庫へ運んでいくしね、とにかく、機械を使うので、仕事はとても順序よく運ばれているよ。」

おじさんは、よくわかるように話してくれます。

春雄くんは、町の港へいったとき、石炭を自動式の起重機でつぎつぎと荷あげしていたのを思い出しました。

「おじさん、日本からもいろいろな品物を送り出しているのでしょうか。」

春雄くんが、またたずねました。

「そうだね、いろいろ送り出しているね。」

「絹織物や陶器も積み出していますね。」

「よく知っているね。そのほか綿織物や機械類も出しているのだよ。でも、送り先は、品物によってちがっているがね。」

「絹織物や陶器類は、アメリカですね。」

「そうそう。アメリカへは、そのほか電球や茶なども積み出している。」

そのとき、おとうさんが、

「ほおう、電球も輸出しているのかな。」

と、おどろいたようにいいました。

「そうです。電球はかなり多いようですよ。」

と、おじさんはおとうさんの方を見ながらいいました。そして、また話を続けました。

「そのほか、アメリカへ積み出すものには、おもしろい物があるよ。竹のくま手やむぎわらぼうし、それに岐阜ぎふちょうちんのようなものだな。」

「岐阜ちょうちんなんか、どうするのでしょうか。」

「それはね、サンフランシスコのおばさんのように、日本からアメリカにわたっているいろいろの仕事をしている人たちはもちろんだが、アメリカの人たちもこのんで使っているのだよ。」

おじさんの話を、うなずきながら聞いていた春雄くんは、

「おじさん、それから羽田の空港のことは、と、たずねました。」

「羽田かね、このごろの羽田は、とてもにぎやかだよ。アメリカからは、パン・アメリカン航空会社や、ノース・ウエスターン航空会社などの定期旅客機が発着している。」

それに、イギリスやフィリピン、中国からの旅客機もやってくるしね。まあ、羽田は、日本では、旅客機の発着の中心地になっっているわけだな。」

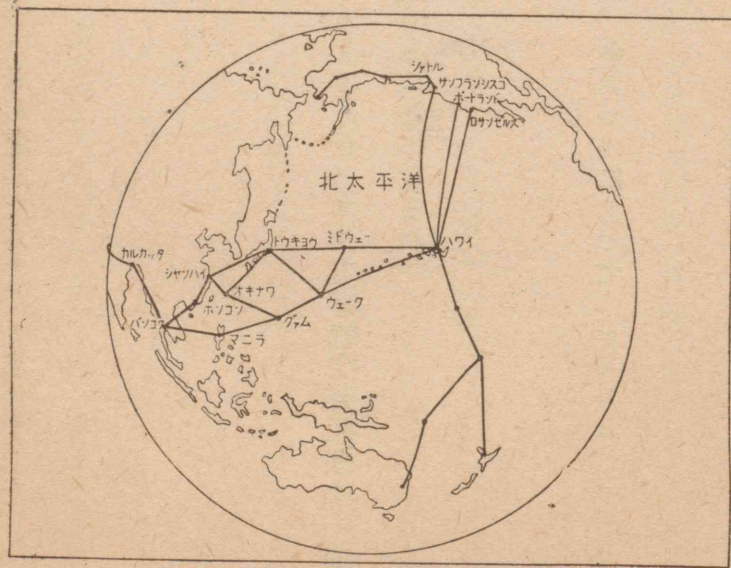
「その旅客機は、みなダグラス機ですか。」

「そうだ。各社ともダグラスC四号を使っているが、パン・アメリカン航空会社では、その外にボーイングB二九号も使っている。」

「どちらが速いのですか。」

「ボーイングB二九はすばらしいね。羽田・サンフランシスコ間を二十四時間で飛ぶからね。」

あの広い太平洋をわずか二十四時間で飛



東京を中心とした空路図

んでしまいう話を聞いた春雄くんは、世の中はずいぶん進んだものだと思います。

しばらく考えていた春雄くんは、

「アメリカ行は、毎日出るんですか。」

と、つづいてたずねました。

すると、おじさんは、

「バン・アメリカン航空会社機は一週三回、ノース・ウエスタン航空会社機は一週四回出るようになってから、毎日一回は出ることになるね。」

と、話しました。

「とちゅう、ホノルルにもよるでしょう。」

「そう、羽田を出て、ウェイク、ミドウェー、ホノルルによつて、シアトル、サンフランシスコ、ロサンゼルスなどにいくのだよ。」

そのとき、おかあさんが、

「まあ、ずいぶん話はずんでいるのですね。」

といいながら、くだものを持ってきました。

たべ終ると、春雄くんは、

「おじさん、そうすると、これからはもつといろいろな品物を外国へ送るようになるの
でしようね。」

と、また話しかけました。

「そうだよ。いまの日本としては、とにかく産業をうんとさかんにして、できるだけたくさんの品物を外国へ送り出さないといけないのだ。そして、日本に少ない品物を送りとどけてもらうのだね。それには、みんながもつともつと働いて、りっぱな品物をつくつて送り出し、外国に信用してもらうことがなによりたいせつなことなんだ。」

おじさんは、力のこもった声でいいました。

この話をじつと聞いていたおとうさんは、

「いや、まったくだ。以前にあつたように、責任のない品物を送つて、外国の信用をおとすようなことではいけないね。」

と、口をはさみました。

「ほんとうにそうです。以前のような考えて外国との貿易をするようでは、とてもだめですよ。わたくしたちのように、この方面の仕事をしていますと、かくべつに、そう感じますね。」

しばらくして、春雄くんはたずねました。

「おじさん、日本は以前から、外国とさかんに貿易していたのですか。」

「そうそう、何んといつても日本は、海に囲まれた島国だから、むかしからよく海へ乗りだしたのだよ。とくに、大陸とのいききは、千年も前から、さかんに行われてきたのだ。でも、日本が、正式にヨーロッパやアメリカなどの国々と貿易するようになったのは、明治の時代になってからののだよ。」

「そのころは、どんな船でいききしていたのでしょうか。」

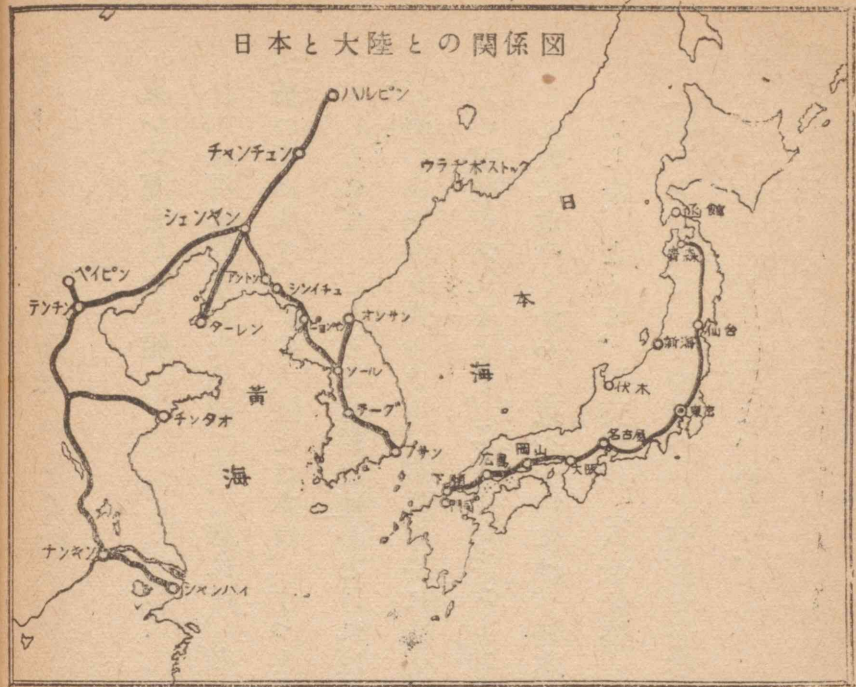
春雄くんがこうたずねますと、おじさんは茶を一口飲んで、大陸との間をいききした船の話や、太平洋航路のことについて、いろいろ話してくれました。

(二) 日本からの船

東シナ海をわたる船

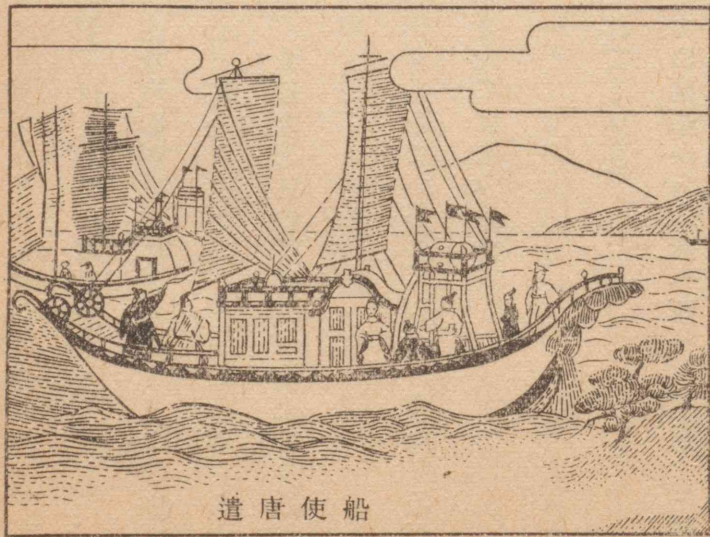
日本は海に囲まれた島国です。西には、朝鮮海峡や東シナ海をへだてて、アジア大陸が続いています。この大陸と日本は、ずっとむかしからいききしていました。海をへだてているので、どうしても船を使わなければなりません。船の発達しないむかしでも、玄界灘のあら波を乗りきり、朝鮮半島にたどりついて、いろいろの交易をしたのです。日本の文化を考えるとき、この遠いむかしからの大陸との関係をわすれてはなりません。こんなにはやくから、東シナ海には、日本からでる船、大陸からはいる船がいききしていました。とくに、平安時代（八世紀終——十二世紀終）のはじめごろには、そのころ「唐」といつていた中国へいく使節や留学生を乗せた船が、この海をわたっていききました。これを、遣唐使船といっています。

そのころ、唐はたいへんな勢いで、いろいろの文化も栄えていましたから、日本は、教



えられるところが多くありました。今の大阪、そのころは難波の津とよんでいましたが、ここから船出して、波の静かな瀬戸内海を西へ進み、玄界灘へ出るのでした。ここは海があるために、難破することがたびたびありました。せつかく船出しても、日本の山が見えなくなるかならないかで難破して、海にのまれたという悲しいことも少なくなかったです。東シナ海は、季節によって風の方向が変わり、とくに冬は海があるのです。この風のふき方を考えて航海することが必要だったので、はじめのころの航

海では、ここまでの調べが進んでいなかったと思われます。そのようにこんな航海をして、唐の国にたどりついた遣唐使の人々や、そうりよ、学生たちは、いっしょうけんめいにそれぞれの研究をつんだり、見学をしたりして、さまざまの新しいことがらを学びました。だが、これらの人々の心配は、帰りの航海が無事であるかどうかということでした。さかな見送りを受けて帰路についた人々の中には、無事に日本に帰り着けなかった人もたくさんありました。このころの船旅が、どんなにこんなであったかがわかります。でも、わたくしたちの祖先は、こうした船の旅を続けているうちに、しだいに東シナ海や南の海を知って、さかんに船出するようになりました。室町時代（十



遣唐使船

五世紀初——十七世紀中)には、はるか南の海までも乗りだしていきました。

ことに、明治のはじめごろから、海外諸国との貿易は、しだいに発達してきました。

あれほど航海にこんなだった東シナ海も、大きな汽船が自由にいききするようになり、中国や南の国々との貿易がさかに行われるようになりました。とくに、神戸や大阪、門司、長崎と、中国のシャンハイ、ホンコン、大連などとの間には、海上の交通が発達してきました。

ところで、大陸への船は、こんなにむかしからいききしていたのですが、東にひろがる海——太平洋の航路は、どのようにして開けてきたのでしょうか。

太平洋航路

この広い太平洋を、はじめて乗りきった人はだれでしょう。

今から四百三十年ほど前のことです。南アメリカの南端から、西へ西へと航海する船隊がありました。これは、ヨーロッパからアジアの島々をめざして船出したイスパニアのたんけん隊の船だったのです。いろいろ苦しいめにあいながらも、ついにアジアの一

角にたどり着くことができました。そこはフィリッピンのミンダナオという島でした。

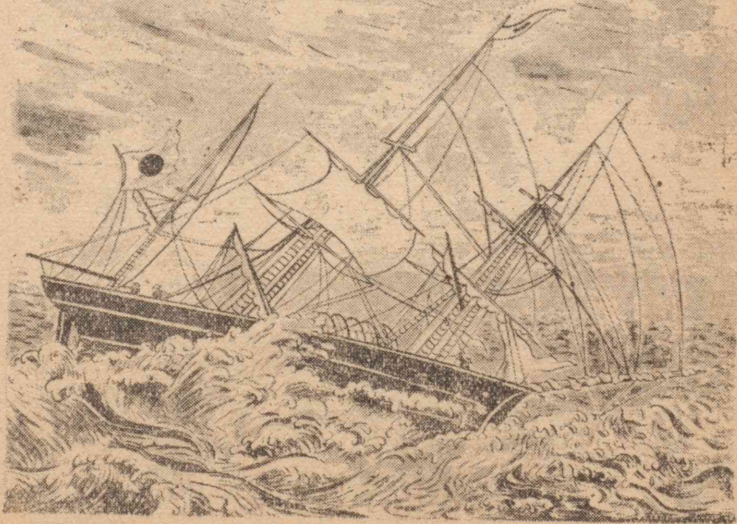
その船隊の隊長が有名なマゼランという人です。つまり、太平洋をはじめて横断したのは、このマゼランのひきいるイスパニアの船だったのです。

このころから、航海術の進んだ国々では、さかんに世界の海へ乗りだしはじめました。やがて、ポルトガル・イスパニア・オランダ・イギリスなどの船が、めずらしい品物を乗せて、はるばると日本へもやってきました。それは、今から四百年ぐらい前のことです。ところが、そのころの日本では、外国船のくるのを制限したため、この交通もまもなくとだえてしまいました。それから後、約二百年の間は、オランダや中国の船がときどき長崎にくるにすぎませんでした。しかし、一八五三年には、アメリカのペリーが、通商のために艦隊をひきいてやってきました。これに続いて、イギリスやフランスなどの船も日本にやってくるようになりました。こうして、日本はふたたび広い世界と結びつき、世界の国々と通商するようになったのです。

通商をはじめてまもなく、太平洋をへだてたサンフランシスコと横浜との間に、定期

のゆうびん船が就航するようになりました。はじめに日本に着いたのは、コロラドというゆうびん船で、今から八十年ぐらい前のことです。

ところが、それより十年ぐらい前に、日本人の手で船を動かして、この太平洋を乗りきっています。その船の名は咸臨丸かんりんまるといって、わずかに二百五十トンぐらいの船だったのです。こんな小さな船で太平洋を横断しようとするのですから、航海長の勝安芳かつやすよしをはじめ、乗組の人たちの苦心は、一通りではなかつたでしょう。東京湾とうきょうわんの品川おきを船出してから、三十七日もかかって、サンフランシスコの港にとり着いているのです。しかも、船は大あらしのために、さんざん破損していたということです。その後、日本とアメリカとの間には、太平洋を



こえて、国のいききをはじめたのです。船が発達していたアメリカでは、この大きな海も自由に乗りきることができましたが、そのころの日本は、まだ船が発達していなかったのです、たいへんなことでした。

こうした歴史のある太平洋航路も、船がめざましく発達するにつれて、自由に航海ができるようになりました。ことに、太平洋をへだてて日本とアメリカとの間には、客船も貨物船も、さかんにいききました。アメリカからはいる船には、綿や石油・機械・食料品・木材・自動車などが積まれていました。日本から出る船には、生糸や絹織物・陶器・茶・おもちゃなどが積んでありました。横浜や神戸から船出する大きな汽船は、北太平洋航路や、途中ハワイに寄航する中央の航路を東に進んで、アメリカ西岸のシアトルやサンフランシスコをめざして航海をしたのです。

また、南へ進んで、南アジアの島々や、ずっと西のインドやアフリカ、ヨーロッパの間にも航路は開けていきました。これらのる船、はいる船が、日本はいうまでもなく世界の国々をうるおしてくれるのです。

(三) アメリカだより

カリフォルニアのおばさんから

春雄さん、このあいだは、はるばるお手紙をありがとう。みなさん、たいへんお元気におくらしのようすで、うれしく思いました。おばさんのうちも、みんな元気で果樹園かじゆえんにて働いていますから、どうぞご安心ください。こちらは、ずいぶん暑くなってきました。日本も、もう夏でしょう。

では、この前のお手紙におこたえして、こちらのようすをお伝えしましょう。手紙によると、このごろ、学校の給食に、アメリカからのほしぶどうやミルクをいただいているとありましたから、はじめにくだものについてお知らせすることにいたしました。

この地方では、日あたりのよいほし場に、見わたすかぎりぶどうやあんずのほしてある光景が見られます。これらのほし場には、ぶどうを入れたはこが、何百もずつとならべてあります。こんなほし場が、あちらにもこちらにもたくさんあるのです。

その光景は、ほんとうにすばらしいもので、春雄さんにも見せたいほどです。ぶどうといえは、日本のぶどうだなを思うでしょうが、こちらでは地面の上に、はわせているところもあります。夏になってみのもつてくると、大勢の人たちがこれをとります。とったぶどうは、そのまま店にもだしますが、大部分は、かんそうさせて、たくわえるのです。こうしてできたのが、わたくしたちやあなたたちの口にはいるわけです。

それから、つぎにこちらの公園について、少し書きましょう。

こちらの公園でいちばん感じたことは、そうじがたいへんいきとどいていることです。紙くず一つ落ちていません。番をする人も見えませ



ほしぶどうの採取

んし、たてふだも立ててはありませんが、ほんとうにきれいです。ここで子どもたちが楽しそうに遊んでいます。山の地方にある公園にいくと、きじやはとがいます。わたくしたちがいつても、おどろいて飛びたたないほどよくなれています。日本でも、しかやはとがよくなれていて、手の上のえさをたべにくる公園がありました。みんながいたずらさえないと、ほんとうによくなれてくるのですね。

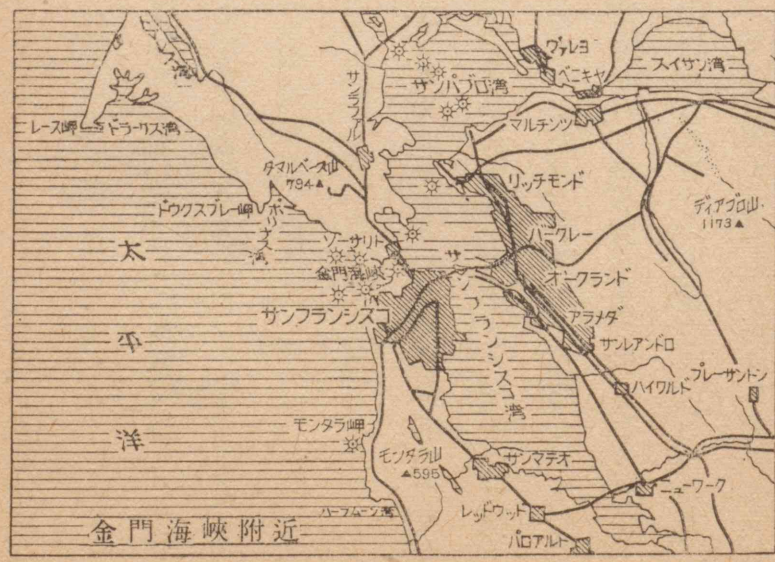
アメリカの山の公園で名高いヨセミテ公園やレーニア公園にいくと、深い山からしかやくまがあらわれてきます。人々は、そのたびに自動車をとめてパンなどを投げてやります。自動車のステップに足をかけて、えさをねだるのです。こういえば、あのくまが——とふしぎに思うかもしれないませんが、ほんとうのことですよ。

おしまいに、あなたがびつくるような、サンフランシスコの橋の話をして、おわかれにいたしましょう。長さが十三キロメートルもある橋が、サンフランシスコにあるのですよ。「十三キロも——そんな長い橋があるものか」と、おうたがいになるかもしれませんが、ほんとうなのです。地図のように、サンフランシスコからゴート島を通り、

オークランドにかけた橋がそれなのです。この橋のため、両市はみっせつに結ばれているのです。

それから、サンフランシスコには、高い橋もありますよ。それは、金門海峡にかかっている金門橋です。長さは二キロメートルぐらいですが、この橋の下を大きな汽船がでていますから、ずいぶん高くかけてあります。ことに、赤くぬった二本の高い鉄の塔は、この金門海峡をかざっています。

こんどは、これだけにいたしましょう。そのうち、讓治が、シカゴやニューヨークへ、しばらく旅行することになっていきますから、その旅行が終つたら、またあちらのようすを

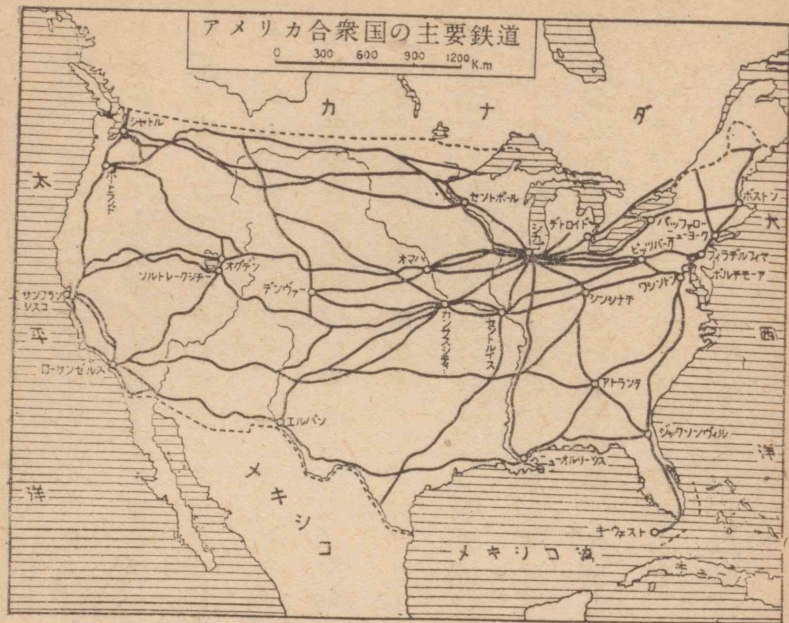


おたよりさせることにいたしました。

春雄くん、ちょうど十日ほどまえに旅行から帰ってきました。これから、わたくしが見てきたシカゴやニューヨークについてお知らせしましょう。

ロッキーをこえて

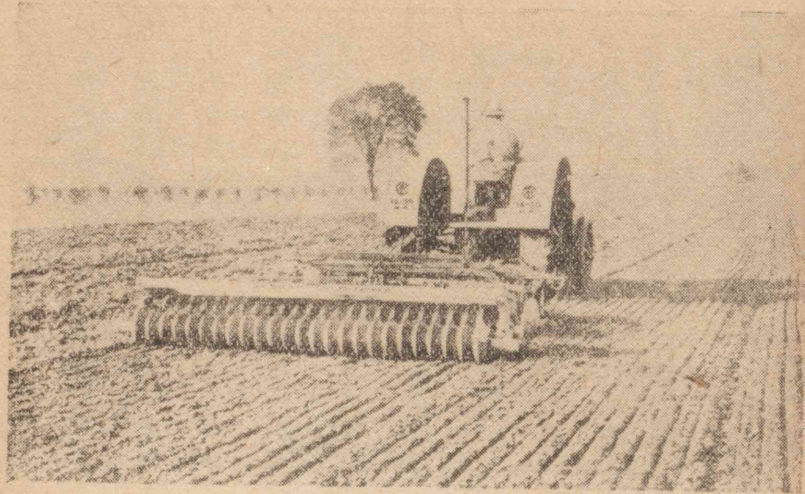
サンフランシスコを出発した大陸横断の列車は、カリフォルニアの低地を東へ走りま
す。やがて、ゆくてにシエラネバダの高い山脈が見えはじめます。三千メートルから四千
メートルの高い山々が雪をいただいでそびえているすがたは、じつにすばらしいもので
す。この雄大な風景をとりいれたきほどの大きな公園がいくつかありますが、その中で、
ヨセミテ公園やレーニア公園が有名です。この山脈をこえると、大盆地オアシスにかかります。
汽車は、はてしないあれ野のまっすぐな線路を、なん時間も東へ走り続けます。そのう
ちに、ロッキ山脈にかかります。地図を見ればわかるように、この山脈がアメリカ大陸



を東と西との二つに分ける大きな分水れ
いとなっています。

この山脈にかかると、さすがの大陸横
断の大きな機関車も、速力をおとして走
ります。ここを横断する鉄道には、こう
ばいが急なため、五台の機関車で走ると
ころもあるといわれています。これらの
山々には、みごとなどどまつやからまつ
の森林が続いています。この国からカナ
ダにかけては、木材がゆたかに産出され
るので、国内で使用するだけでなく、遠
く海外へ積み出しているのです。

汽車は、ロッキ山脈から東に流れる



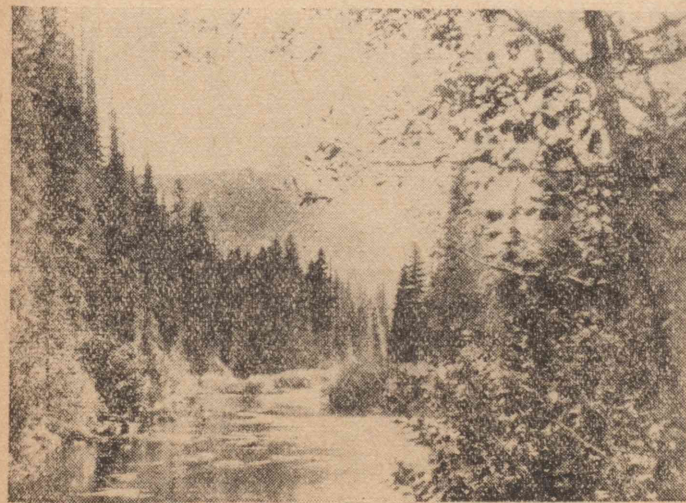
トラクターの動いている農場

中央大平原にあるこのふきんの農業地帯は、ずっと南の方へも、北のカナダの方へものびています。南といえば、石油の産出で知られているテキサス州から、フロリダ半島の方まで、この農業地帯は続いているのです。メキシコ湾の沿岸地方は、かなり暑い気候ですから、ずっと北の地方の作物とは、ちがったものをつくっていることもわかるでしょう。

フロリダ半島やメキシコ湾の沿岸地方では、オレンジやパイナップルなどのくだものやさとうきびをたくさんつくります。くだものといえは、アメリカの人たちの食たくには、なくてはならないものです。

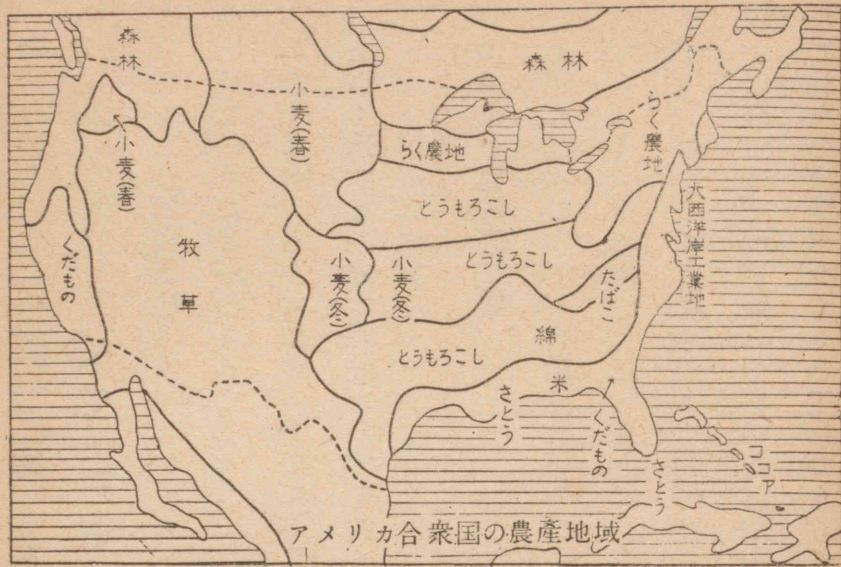
ミシシッピー川の支流にそつて走ります。この山地を走りぬけて、ふもとの地方に進むと、もう高い山は見えませんが、牧草のはえた草原が、ずっとひろがってどこともなく明かい光景が開けてきます。その草原には、広い牧場が続いて、ひつじやうしがゆつたりと青草をたべているのが見られます。このようにひろびろとした光景をまどの外に見せながら、汽車は速力をまして東へ走り続けます。

やがて、よく耕やされた農業地帯が開けてきます。よくみのつた小麦の農場が、ずっと、はるかかなたまで続いている光景は、すばらしいものです。このふきんの駅に停車すると、たくさんうしやひつじをのせた貨物列車が、ホームにはいつているのがめだちます。



ロッキー山脈中の森林

これから少し北に移ると、綿花やとうもろこしやたばこをつくる地帯になります。綿花は、世界のどこでもつくられるというものではありません。気候があたたかくて、ほどよい雨がふらないといけないのです。インドのデカン高原や、中国、エジプトなどでつくられています。世界産額の半分近くは、この地方でつくられています。この綿花は、おもに大西洋岸の紡績工場ほうしんこうじょうに送られています。が、それだけでなく、海外へたくさん積み出されています。なかでも、日本へはたくさん積み出されているのです。それが、紡績工場ほうしんこうじょうでどんなにされているかは、自分で調べてご



らんなさい。
このふきんからずっと北の五大湖地方まで
の1帯にかけては、とうもろこしがたくさん
つくられています。
このとうもろこし地帯から、西の方には、
小麦地帯が帯のように南から北へずっと続い
ているのです。ただ、南の小麦地帯では、冬
に種をまきますが、北の地方では、気候が寒
いので、冬がすぎて春がきてから種をまくと
ころがちがいます。つまり、南は冬まきの小
麦地帯、北は春まきの小麦地帯になっている
わけです。このようなことをみても、農業地
帯の広いことが想像できるでしょう。

今、お話ししてきた小麦地帯では、日本のような方法で耕作されているところもありますが、多くは機械を使います。土地を耕やすにもトラクターを動かします。種まきやかり取りも、やはり機械を使っているのです。ですから、広い農場の仕事も、どんどんはかどっていくことがわかるでしょう。

わたくしは、シカゴに着くまでに、二回ほど汽車をおりて、より道をしましたが、ずっと乗り通すと、六十時間たらずで着くことができます。

フォード自動車工場

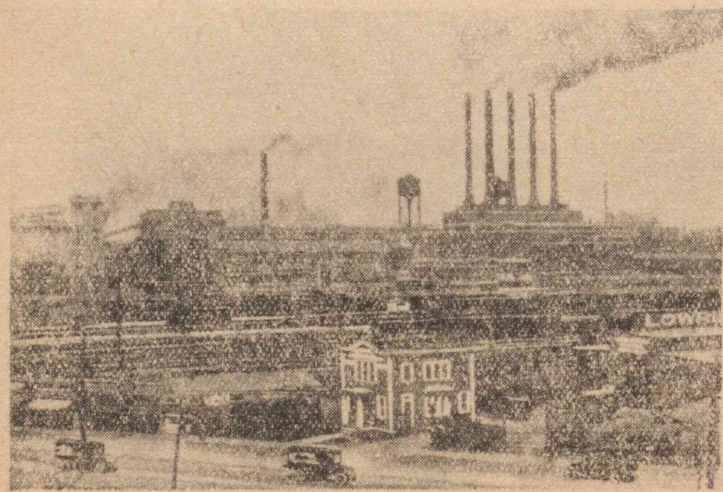
世界の国々の中で、自動車をいちばんよく利用しているのは、なんといってもアメリカでしょう。その数は、三・五人に一台のわり合になるといわれています。このことだけでも、どんなに自動車がよく利用されているかがわかるでしょう。シカゴやニューヨークの町では、つぎからつぎへと自動車がいききしています。

これらの自動車をつくる工場のうちで、世界に名高いのが、フォード、ゼネラル・

モーターズや、クライスラーなどの工場です。このような工場は、いずれも五大湖の一つ、エリー湖岸のデトロイトにあります。

わたくしは、ぜひ自動車がつくられているところを見たいと思つて、このデトロイトのフォード工場をおとすれたのです。工場にはいつたわたくしは、そのきぼの大きいにおどろいてしまいました。機械と鉄骨のこみあつた広い工場です。うんばん機の上には、土台だけできたもの、半分できかけたもの、ほとんどできあがつたものが、ずらりとならんでいます。

このうんばん機は自由に動くようになって、一組の工員のところの作業がすむと、ゆるやかに動いてつぎの作業場にうつっていきます。



フォード自動車工場

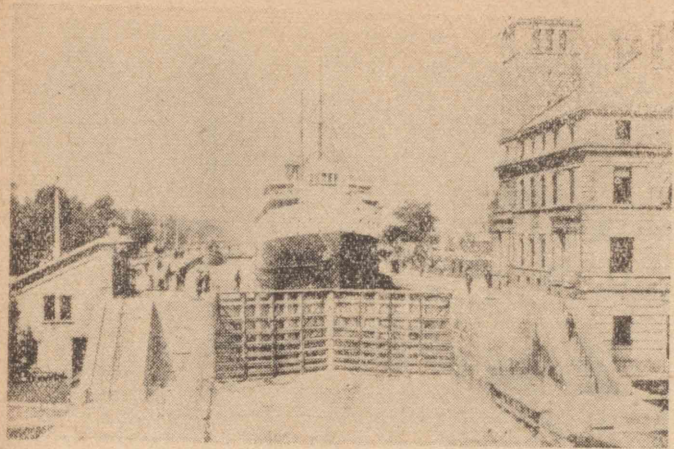
つまり、工員は動かないで、組み立てられる自動車の方が動いていくことになるわけです。こうして、たくさん自動車がつぎつぎに組み立てられていますが、一つ一つの職場で働いている工員の数の少ないのにはびっくりしました。これは、すぐれた機械を使うので、人手が少なくても、仕事の能率が上がるのですね。

さて、はじめの組では、別のところから運ばれてきた後車輪の車じくを、うんぱん機の上に、あるかんかくをおいてのせていきます。つぎの組のところでは、前車輪の車じくをとりつけています。三番目の組では、車の台になるかまちを車じくの上においています。第四の組では、スプリングと車のかまちをボルトでしめつけています。重いエンジンも、機械でつりさげてすえつけるのですから、自由自在のようです。見ている間に仕事がかどっていきます。つきからつきへと、つくりかけの自動車が流れていって、いちばんしまいにゴム車がとりつけられるのです。こうして一台の黒光りの自動車ができてあがってしまいます。そのときには、すぐあとの自動車もほとんどできあがっています。できあがった自動車は、試運転をされて、プラットホームの貨車に積みこまれます。

このような作業の方法を、進行式組立法といっていますが、フォード工場では、この方法をはやくからとり入れたのです。よいと思う方法はどしどしとり入れて、能率をあげる場所はやはり、アメリカの工場だとつくづく感心しました。たくさん製造するときには、一日に七千台あまりを数えたというほどです。春雄くんにも、こんな工場を見せたら、どんなにか喜ぶことだろうと思いました。これほどすばらしい自動車工場をはじめたのは、ヘンリー・フォードです。デトロイトにフォードの工場ができてから、まだ五十年もたつてはいませんが、およそ十三万二千人の人が働いており、フォード、マーカリー、リンカーンなどの乗用車を合わせて一年間に



よそ七十五万六千台のほかに、トラック二十四万八千台、トラクター、バスを合わせて、およそ十万台（一九四七年度）がつくられて、世界の各地で使われているのです。



ソー運河の水門

春雄くんは、どうしてこのデトロイトに、このようにたくさん自動車工場が発達するようになったのだろうか、思うことでしょう。このデトロイトのある五大湖地方の西には、世界一の鉄の産地があります。その上、東のペンシルバニア州には、大きな炭田が開けています。この鉄や石炭が、自動車工場に深い関係にあるのです。五大湖は水面の高さはちがいますが、特別の運河で結んでありますから、船のいききが自由にできます。そこで、この水運を利用して、東の石炭を湖岸地方へ運び、西に産する鉄鉱を東部地方へ積み出し

ます。こうして東に運ばれた鉄鉱は、炭田の中心のピッツバーグで製鉄されるのです。それで、この地方では、原料の鉄鋼と動力の石炭がたやすく手にはいることがわかるでしょう。このようにめぐまれたところにあるのが、デトロイトやシカゴなのです。

ところがこの地方は、自動車工業が発達しているだけではありません。五大湖地方は、アメリカでもっとも工業のさかんな地帯ですから、もう少し書きそえておきましょう。東から西へ、北から南へ、あみの目のようによくのびている鉄道には、日本で使われている機関車よりも、ずっと大きくて速力のでる機関車が使われています。この機関車をつくる工業の中心地がシカゴです。

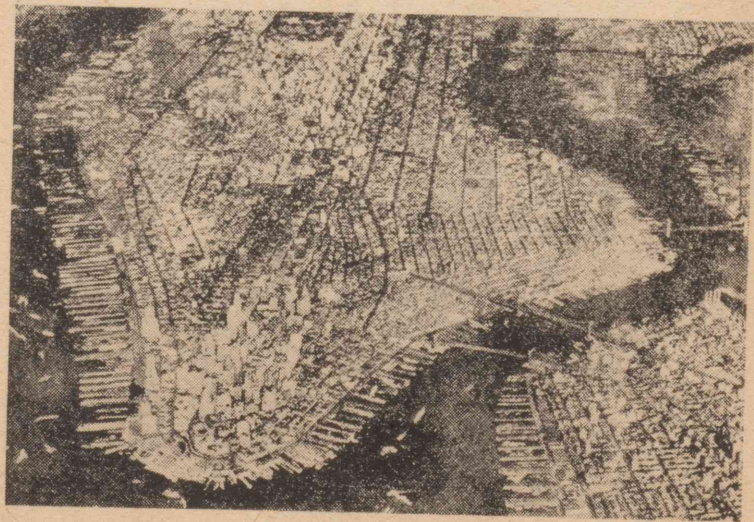
また、シカゴの工業でわすれてならないのは、農機具の製造です。さっきの話のように、この地方の西部には、大きな農業地帯が開けていて、トラクターやかり取り機が使われていますから、この地方にそれらの農機具をつくる大きな工場が発達しているのです。

ニューヨークの町

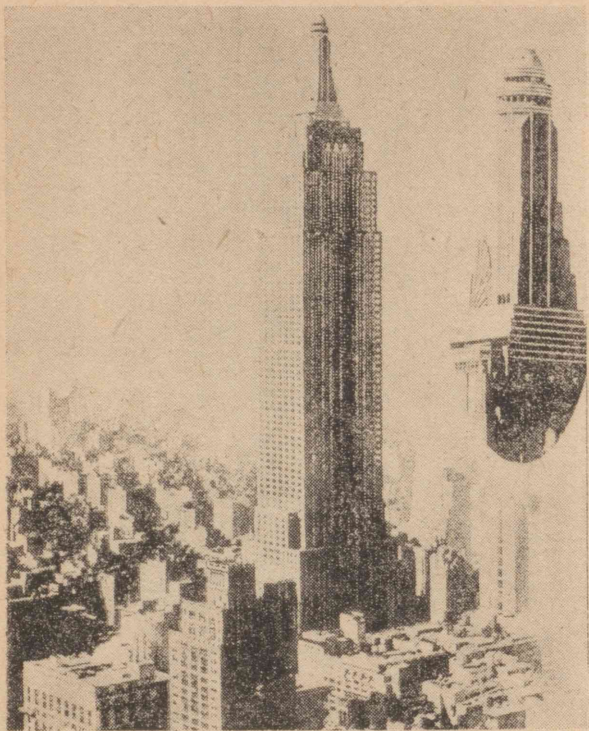
写真の中に、すばらしい高い建物がたちならんでいるのがあるでしょう。それがニューヨークの写真です。

ニューヨークは、大西洋にそそぐハドソン川の河口にできた町で、人口七百万あまりもある大きな都会です。町は、ハドソン川の左岸のブロンクスとマンハッタン島・ロング島の西部、ステートン島にひろがっています。そのうちで、マンハッタン島にはすばらしく高い建物がたちならんで、外では見られない光景です。

世界でいちばん高い建物といわれているエンパイア・ステート・ビルディングは、百



ニューヨーク



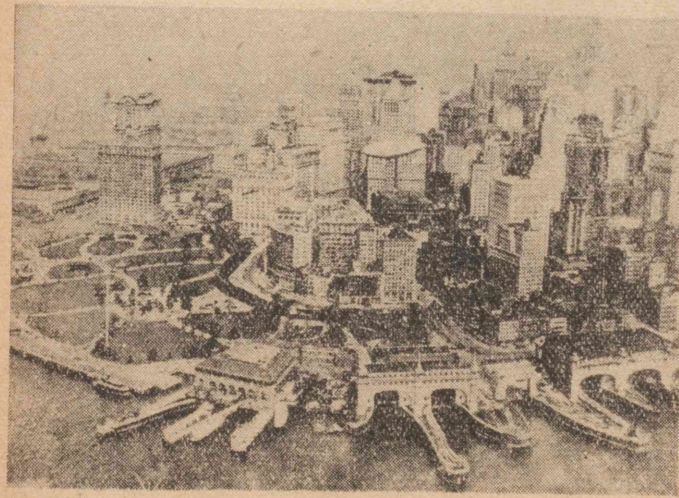
エンパイア・ステート・ビルディング

二階もあって、だいたい三百八十メートルの高さです。つぎに高いのが、クライスラーという建物で、七十七階もあって、三百メートルをこえています。このほか、二百メートルをこえている建物だけでも、十いくつもあります。雲にとどくようなこのエンパイア・ステート・ビルディングには、もちろんエレベーターが通じています。九十なん階までエレベーターがあがり、それから階段をのぼると、屋上まででることができます。わたくしも、大勢の人たちが、きまりよくさつさと乗りおりしているこのエレベーターに乗って、屋上までのぼってみました。

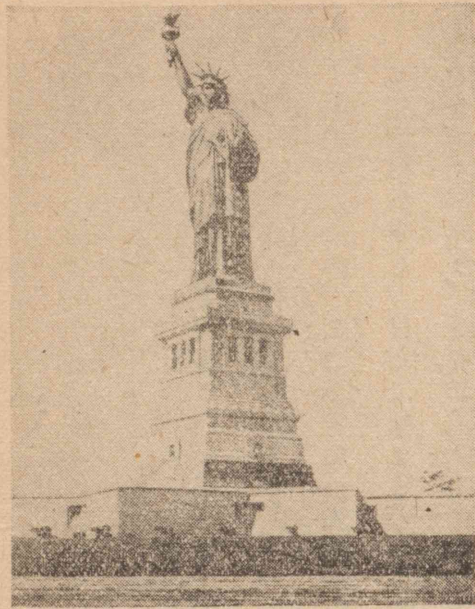
その日は風のない暑い日でしたが、この上ではすすしい風がふいていました。でもなんだか建物がゆれているように感じました。八十六階にある観望台から町をながめると、はるか目の下の道を走る自動車や、歩いている人の群が、まるでありのように見えます。また、港にははいりする汽船も、おもちゃの船がならんでいるようにしか見えません。

高い建物の間の道路には、たくさんの自動車がいききしています。こうずいのような自動車のむれですが、ほんとうに、せいぜんと走っています。その中央を市内電車が走っています。夜になれば、こうこうとした電燈がかがやいて、美しい「電燈の町」となります。

このマンハッタン島の中央には、中央公園や



ニューヨークの港(向かって左上にさん橋がたくさんある。)



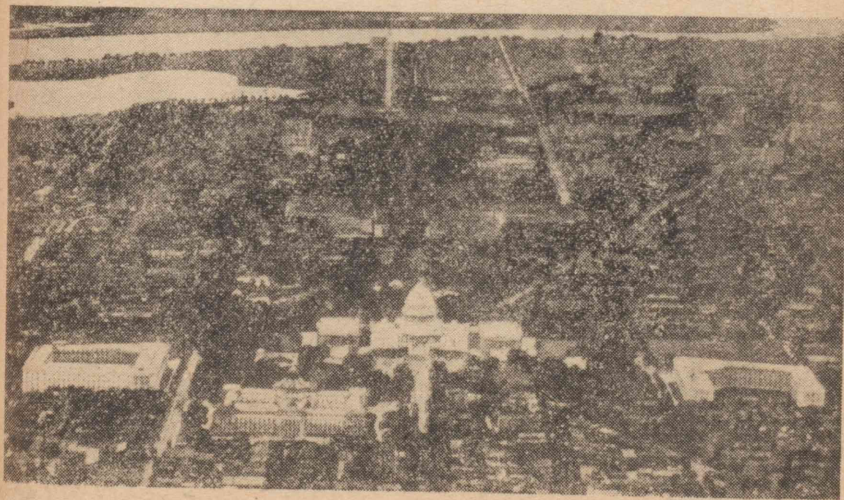
自由の女神の像

美術博物館、科学博物館などがあります。世界のめずらしい品々を集めたこれらの博物館では、人々が熱心に見学していました。南のウォール街には、市庁や中央郵便局、裁判所をはじめ大きな取引所や銀行がたちならんで、ニューヨークの中心部となっています。また、島の東側のハドソン川岸には六百以上のさん橋がくしの歯のようになっています。ここで、ここにでははいりする大きな船が横づけになるのです。ハドソン川からニューヨーク湾にかけての海底には、谷のような深い所が続いているので、大きな船でも自由にでははいりすることができます。ニューヨーク湾内のベドローという小さな島には、かた手にあかりを高くささげた、自由の女神の像が立っています。この像は、高さが四十メートル以上もあって、その中にはエレベーター

ーが通じています。この像は、世界でもっとも自由を愛しているアメリカ国民のほこりを示しているものです。

ロング島の南は工業地区になっていて、工場がたちならんでかっぱつな光景を見せています。ニューヨークのほか、このふきんの大西洋岸には、工業都市が多く、日本にもよく知られているのは、ボストンの皮製品や、ウォルサムの時計でしょう。また、ニューヨークの西のパターソンは、日本から送られた生糸で絹織物をつくる「絹の町」として、名の知られたところです。

ワシントン市は、春雄くんもよく知っているでしょう。この国の首府ですが、シカゴやニ



ワシントンの都心部

ーヨークのように工業も商業もさかんではありません。議事堂を中心として大きな道路が放しや状に通じ、その間にごぼんの目のような市街が開けています。大統領が住んでいるホワイト・ハウスや、ワシントン塔や、博物館などがあって、この国のいろいろの歴史を物語っています。ワシントンは、ほんとうに政治の町だといえましょう。

学習の手びぎ

- 一、日本は、むかしから大陸の国々とさかんにいききしてきましたね。これらのいききによって、わが国はどんなえいききょうをうけたでしょうか。歴史の本によって、調べてごらんください。
- 二、アメリカのペルーが、艦隊をひきいて日本をおとすれたころの世界のようすや、そのころのわが国のようすについて、もっとくわしく研究してごらんください。
- 三、日本は、この七十年ぐらいの間にたくさん航路を開いて、外国とさかんに貿易をしてきました。どんな航路が開かれたでしょうか。また、どんな品物を取引きしていたでしょうか。どのような貿易の歴史について調べてごらんください。
- 四、アメリカの山脈や川、平野、おもな都市、鉄、石炭などの地下資源などについて、もっとくわしく調べてごらんください。

三 米をつくる国々

(一) 水田に働く人々

五年生するとき、米についていろいろの研究した春雄くんは、もっと、ほかの国々の米作についても調べてみたいと、思っていました。そこで、こんどの夏休みに、この問題を調べることにしました。おとうさんにそうだんすると、「いなかのおじさんにおたずねするのがいいだろう。」と、おっしゃいました。

おじさんは、太平洋戦争の終るまえには、南方のボルネオ島で農場を経営していましたが、今では、いなかで農業をしているのです。旅行ずきのおじさんは、マライやスマトラ、ジャワなどをまわってきたので、これらの地方のめずらしい写真なども、たくさん集めているそうです。

朝早くてた春雄くんは、四時間ほど汽車にゆられて、昼ごろおじさんの家に着きました。おじさんは、ちょうど田の仕事から帰ったところでした。春雄くんを見ると、元気な声で、

「やあ、よくきたな。もう夏休みになったのかね。たいへん元気そうな顔色だ。町の中はなかなか暑いだろう。まあ、ゆつくり遊んでいくがいい。」と、いいました。

そのばん、夕飯のすんだあと、みんなでいろいろ話をしました。そのうち、春雄くんは、おじさんに、ほかの国々の米の産地についてもたずねました。

すると、おじさんはいいました。

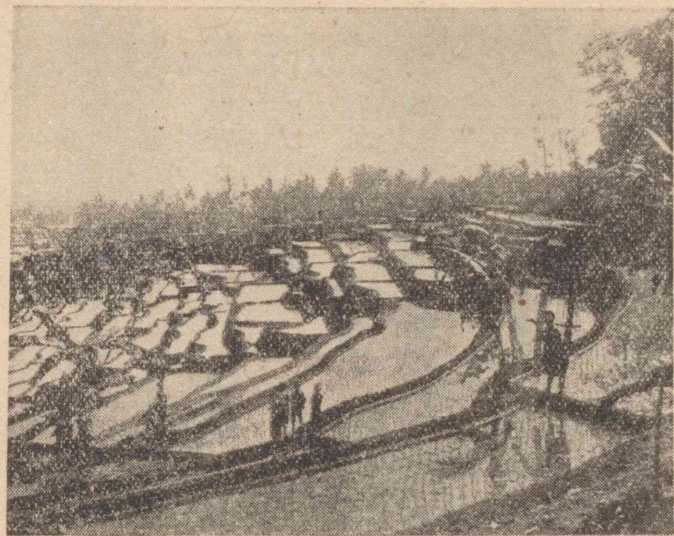
「よしよし、その話もしてあげよう。だが、春雄は、農家のほんとうの苦勞を知っているかね。この苦勞は、話や本だけではなかなかわかるものではないよ。おじさんのてっだいでもしてみることだな。そうすると、その苦勞が少しはわかるよ。さっそく、あすの朝にでも、田の水の見まわりにいくことにするかな。」

あくる朝、五時前におこされた。春雄くんは、おじさんといつしよに、田の水の見ま

わりにでかけました。

おじさんの田は、山のふもとにあつて、かいだん状になっています。青々としたいねには、朝つゆがやどつていました。

おじさんの話では、この田は五まいで三段あつて、肥料がじゅうぶんな上に、天候にめぐまれると、二十一俵の米がとれます。村でも上田で、秋の検見のとき、委員の人々からほめられたこともたびたびあるそうです。検見というのは、村の人々から選挙された委員が、田のできぐあいを調べるこ



かいだん状の水田

とです。この結果で、一人一人の供出量がきめられます。

おじさんは、田の水口のところで、石とどろとで水のかげんをしました。

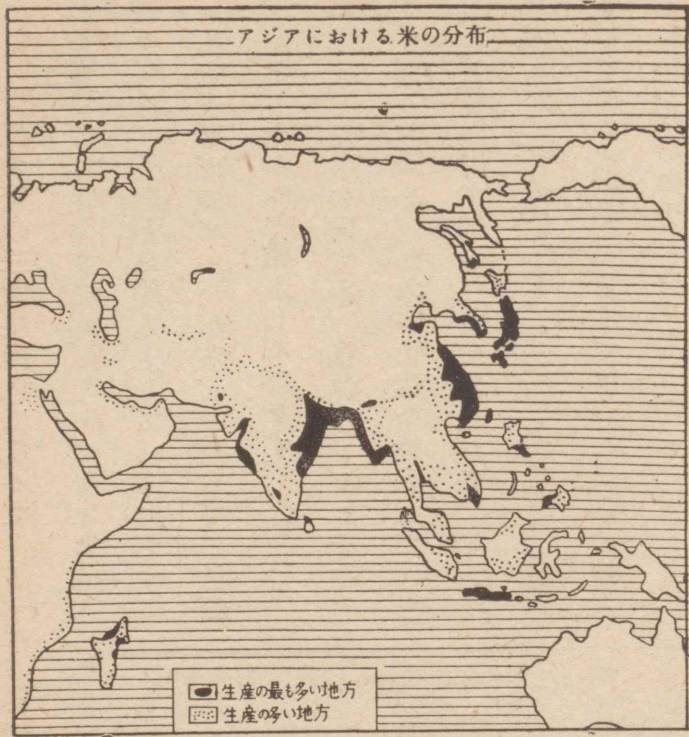
「水が深いと田が冷えて、いねの育ちもわるいし、それかといって、水が少ないのもいけない。また、ときには、もぐらなどがあぜにあなをあけて、水をからしたりすることもあつてね。水の見まわりはともたいせつなんだよ。」

おじさんは、春雄くんの知らなかったことを、教えてくださいました。それからまた、草取りのことも話してくださいました。いそがしい田植えがすむと、あとは一番草・二番草・三番草と、ひき続いて草取りをするのだそうです。草取りのときには、除草機も使いますが、手でも取ります。かぶのまわりの土をかいて、やわらかくしてやると、よくぶんけつするということです。春雄くんは、一日中こしをまげて田の草を取るのには、どんなにたいへんなことだろうと思いました。

帰り道で春雄くんが、

「おじさん、米作りもたいへんですね。」

と話しかけると、おじさんは、



米を主食にしているのは、アジアの人々です。アジアの米の生産高は、世界の九十五パーセントぐらいにもあたっています。ここにある米の分布図を見れば、すぐわかるように、米の産地は、日本・韓国・中国・インドシナ・タイ・ビルマ・インド・フィリッピン・マライ諸島などです。そのほか、イタリアの北部やアメリカの南部、エジプト、ブラジルなどでも、米がとれますが、それはわずかなものです。ところで、日本と中国とインド

米の産地

「そうだよ。まだこのほかに、病虫害の予防や、肥料のこともあるしね。なかなかだよ。」
 と、いいました。
 また、農事試験場では、品種の改良などにもつとめていることを話してくれました。朝風がこちよくほおをなでていきます。
 その夜、春雄くんは、南方のめずらしい写真や地図を見ながら、米の産地の話を聞きました。

明治12年より昭和21年までの収かくと作付段別

年	度	作付面積 千町	実収高 千石	一段あたり 収量 石	
明治	12	16	2,571	30,868	1.20
	17	21	2,631	35,402	1.34
	22	26	2,755	38,585	1.40
	27	31	2,784	39,697	1.41
	32	36	2,845	42,297	1.49
	37	41	2,898	47,378	1.63
	42	大正 2	2,979	50,253	1.69
	大正 3	7	3,067	56,130	1.83
	8	12	3,131	59,069	1.89
	13	昭和 3	3,164	58,575	1.86
	昭和 4	8	3,221	62,574	1.94
	9	13	3,204	61,765	1.93
	14	17	3,165	62,917	1.98
		18	3,110	62,887	2.02
		19	2,979	58,558	1.96
		20	2,892	39,149	—
		21	2,437	61,386	2.16

とは、世界の米の三大生産地になっていますが、いずれも人口が多いので、その国でとれるだけでは足りません。それで、これらの国々では、外国から輸入もしているのです。

インドは東のビルマから、中国も南の仏領インドシナから、輸入しています。以前には、わたくしたちの国でも、仏領インドシナやタイやビルマから、かなりの量を輸入していました。積み出す港のなまえをとって、トンキン米とか、サイゴン米、ラングーン米などと、よばれています。日本では、これらの輸入米をいっばんにナンキン米といっていました。このように、米の産地は、北は日本から、南は熱帯地方にまでおよんでいます。ですから、

いなにつくり方も、田のようすも、その土地によつてずいぶんちがっています。

大陸の揚子川流域には、広い盆地や平野が開けていて、水田が広く分布しています。

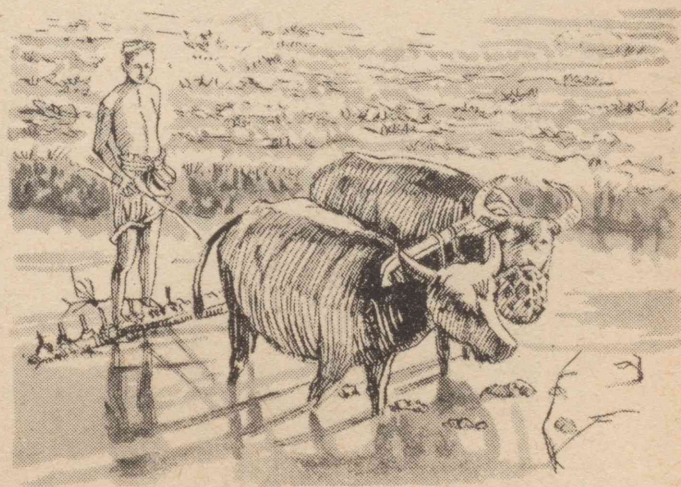


上流の四川盆地や、中部の湖広平野、それに下流の平野などがそれです。ことに、この下流の平野では、広い水田に無数に通ずるクリークを見ることができます。華南の珠江の流域にも、広い水田が開けています。中国の農業でおもしろいことは、華南や華中には、こうした広い水田が見られ、たくさんのお米がつけられていますが、雨の少ない華北や満州では、水田は見られず、麦畑とこりやん畑がひろがっていることです。

インドシナ半島の地方では、メコン川、メナム川、イラワジ川、ガンジス川の下流にも平野があつて、いずれも広い水田が見られます。

しかし、平野の少ない地方では、日本でよく見られるようなかいだん状の水田が、山の上まで続いているところがあります。ことに有名なのは、ジャワとフィリピンです。ジャワでは、四十度ぐらいの急こうばいの山地にまで、水田が開けていて、何百というだんだんの水田が、こがね色に色づいた景色は、みごとなものです。米のつくり方も、ところによってちがいます。

日本や中国、フィリピンなどでは、一年に一回とりいれますが、仏領インドシナ、タイ、ビルマでは、一年に何回もとりにいれをしています。これは、南の地方では気温が一



水牛を使うタイの米作

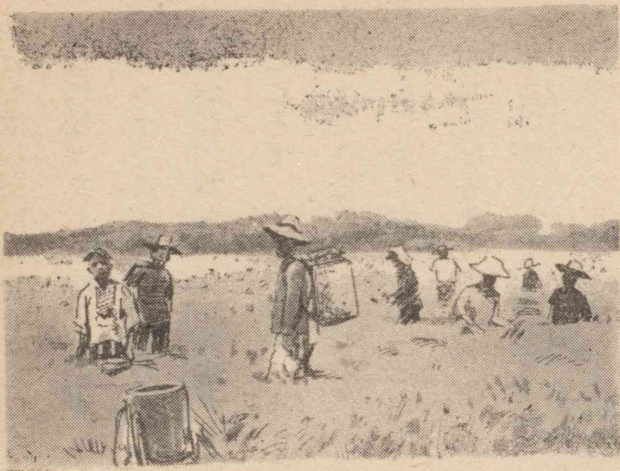
年中高いので、水さえあれば、二回も三回もとりにいれができるわけです。

年二回といつても、タイワンのように、同じ田から二度とりいれるところと、仏領インドシナのトンキン地方のように、ちがった田から、時期をちがえて二度とりいれるところがあります。

もつとおもしろいところは、タイで、一年中、時期をちがえてつくります。ここでは、季節風のために、たくさん雨がふります。その上、この時期に、メナム川はきまつたようにはらんして、上流から肥えた土を流してきます。それで、いねをつくるのに、つごうがよいわけです。

ほつみのうた

いねのとりにいれが、またかわっています。この



ジャワのほつみ情景

地方では、だいたい、まえのページにある絵のように、いねのほだけをつみとるのです。あとに残ったわらは、そのままくさらせたり、焼いたりして、肥料にします。ビルマでは、つみとったほを、適当な大きさにたばねて、かんそうさせます。じゅうぶんかわいたら、これを集めてすいぎゅうにふませ、もみをおとすのです。ところで、ジャワやボルネオでは、とりいれるときには、大勢で楽しそうにほつみの歌をうたいながら、いねのほをつみとります。くわつみに使うような道具を指にはめて、とてもじょうずにつみとっては、せなかのかごに投げこみます。その光景はいかにものんびりしたものです。



(二) 季節 風

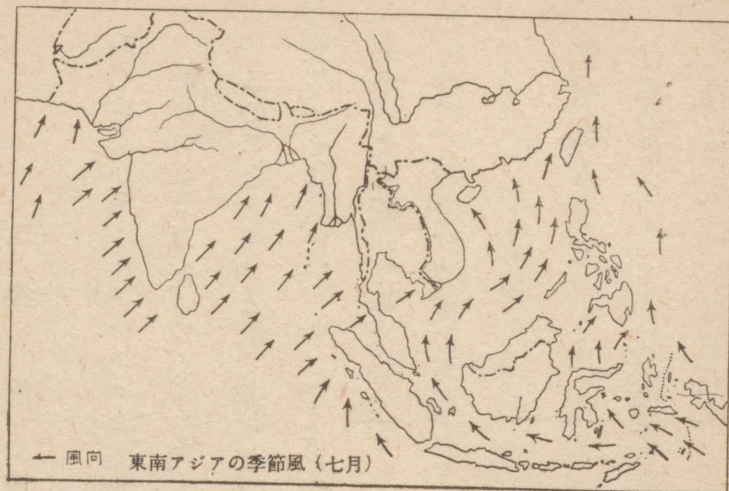
おじさんから、いろいろの話を聞いた春雄くんは、同じ米の産地でも、ところによって、米のつくり方も、つくる時期も、ずいぶんちがっていることがわかりました。それで、このことをもつと深く調べてみたいと思いました。おじさんに話しますと、

「うん、それはいい。ちよつとむずかしいところもあるが、ここによい本があるから、まあ、よく読んでみなさい。」

といって、一さつの本をかしてくれました。

氣候図を見て

はじめに、アジアの氣候図を開いてみました。氣候図には、風の方向がやじるして書いてあります。これで見ると、日本では夏に、南東から風がふいています。東南アジアでは、だいたい南西の風になっています。ところが、よく見ると、赤道より南の方で

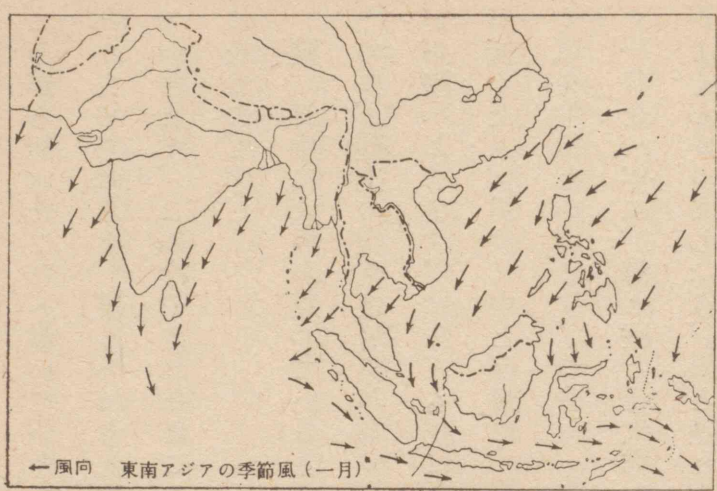


は、日本と同じように、南東風がふいていますが、赤道をこえると、南西に方向を変えています。つまり、インド洋や南シナ海では南西風がふくわけです。

冬はこれと反対で、日本に北西風がふくころ赤道の北の近くでは、北東風がふいているのです。それが赤道に近づくと北風になり、赤道をこえて南にいくと、日本と同じように北西風が変わっています。

このように、季節によって一定の方向にふく風を、季節風とよんでいます。

今まで、おじさんに聞いた米の産地には、季節風がよくふいていることがわかりました。



ここまで調べてきた春雄くんは、では、どうしてこんな季節風がおこるのだろうかと思いました。なんべんも本を読んで考えてみましたが、よくわかりません。そこで、先生にたずねますと、先生はつぎのように話してくれました。

季節風と雨量

夏、海岸地方でよく気をつけていると、半日ずつで、夜と昼との風の方向が変わることがわかります。どうしてこんなことがおこるのでしょうか。これは、ちよつとむずかしい問題ですから、これを話すまえに、どうして風がおこるかということをお話しておきましょう。

ちょうど、水が高いところから低いところへ流れていくように、空気は気圧の高いところから低いところへ動いていきます。この空気の動きが風です。ところで、空気は、あたためられると、ぼうちょうしてうすくなります。反対に、冷やされると、こくなつていきます。この冷やされたところが高気圧になって、あたためられたところが低気圧になるのです。

夏、日中に太陽が照っているときには、海より陸の方がはやくあたたまります。そのため、陸上の空気は温気があがり、気圧は海上よりも低くなります。それで、風は海から陸へふきます。けれども夜になると、陸地は海よりはやく冷えるので、海上の気圧が低くなり、風は日中と反対に、陸から海へふきます。海からふく風を海風、陸からふく風を陸風といいます。つまり、海風は昼に、陸風は夜にふくわけです。

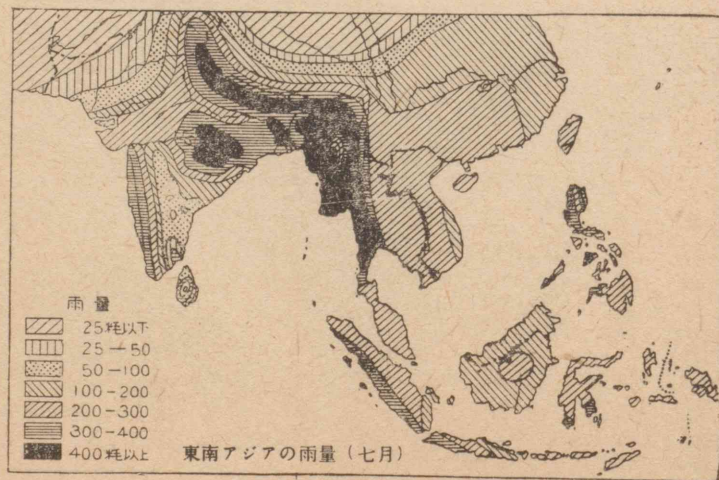
一日を一年に、海と陸とを大洋と大陸とにおきかえて考えると、季節風のおこるわけがよくわかります。海と陸との間に、一日のうちに風の方向が変わると同じわけで、太平洋やインド洋のような大洋とアジア大陸との間に、大じかけにおこる風が季節風なのです。

夏には、太陽が赤道より北の方を強く照らすので、アジア大陸があたためられて、大洋よりも気圧が低くなります。それで、風は大洋から大陸へ向かってふきます。

しかし、冬には反対に、太陽が赤道より南の方を強く照らすので、アジア大陸が冷えて、気圧が高くなります。そのために、風は大陸から大洋へ向かってふくわけです。

ところで、この季節風は雨と関係が深いのです。では、この雨量図を見てごらん下さい。

七月には、インドからインドシナ半島にかけて雨量が多いことがわかるでしょう。これは夏の季



節風のためです。この夏の季節風は、インド洋上をふいてくるので、湿気^{しつげ}を多くふくんでいて、この風が、北にそびえるヒマラヤ山脈や、インドシナの山脈にさえぎられて、この地方にたくさん雨をふらすわけです。

ところが、この地方の一月の雨量図を見ると、夏と反対に、雨量がたいへん少なくなっています。そのわけは、アジア大陸からふいてくる冬の季節風が、かんそうしているからです。こうして、インドやインドシナ半島には、雨季と乾季^{かんき}とがみられます。しかし、スマトラやボルネオなどの島々では、だいたい一年中雨が多いのです。

(三) 暑い国の生活

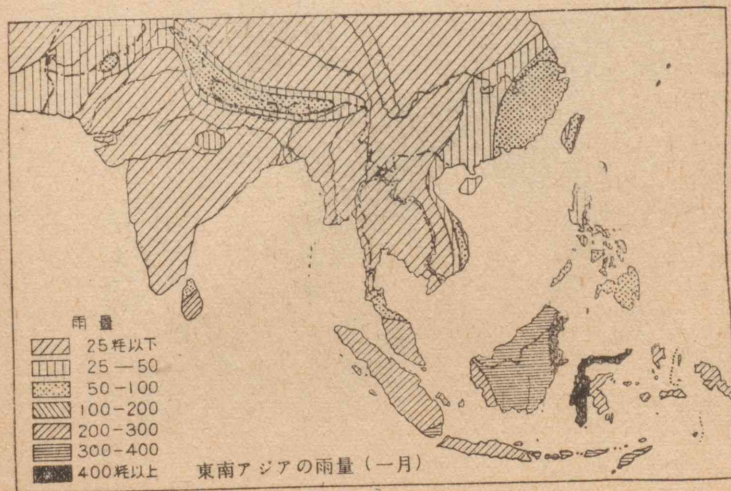
春雄くんは、こうしてこの地方の米作のさかなわけがわかってきました。つぎにまた、おじさんからかりてきた本で、そのほかの産物や暮らしについても調べてみました。

やしとくだ物

だれでも、暑いところというとな、すぐやしの木を思い、やしの木と聞くと、暑いところを考えます。やはり春雄くんも、目についたのはやし林のさし絵でした。この絵は海岸の



海岸のやし林





(1)バナナ (2)ナンカ (3)ドリアン (4)マンゴスチン (5)サウオ

おいしいさとうがてきささとうやし、それから屋根をふくのに使われるやしもあります。このように、いろいろのたいせつなものごとれるので、この地方の人々は、家のまわりにたくさんやしの木を植えています。やしと同じように、人々に知られているくだものは、バナナです。バナナはどこにでもつくつてあります。やはり、いろいろの種類があつて、そのままたべるもの、なまではまずくてたべられないが、フライにするるとたいへんおいしくなるもの、家畜のえさにするものがあります。そのほか、華南のみかんや・ザボンなども、おいしいことで有名です。調べているうちに、いちども見たことのない、めずらしいくだものがあつたので先生にたずねますと、



は、この土地の人々にとって、たいせつなみ物になっています。また、実からは、せっけんや人造バターの原料になるコブラがとれます。かたいかくは、ボタンやいろいろの細工ものにされ、そのうえ、幹は家をつくるのに使われます。そのほか、やしにはいろいろの種類があります。実から油をとる油やし、幹からでんぶんととるサゴやし、花のしるをにつめると、

やし林ですが、やしの木は海岸だけでなく、田のあぜにも川のほとりにも、それから、さとうのおく地にもあるようです。

では、やしは、暑い地方の人々の生活に、どんな役にたっているのでしょうか。もつとも多いのは、ココやしです。直径十五センチメートルほどのココやしの実の液

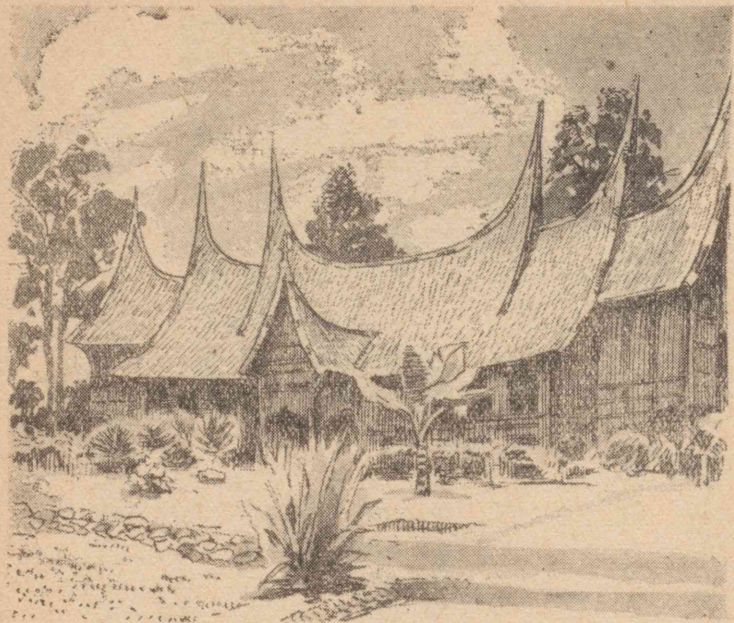
「この絵のまん中にある、いがくりのようなのは、ドリアンです。これはくだもの王さまといわれて、特別のにおいと、こつてりした味とをもっています。その左にあるのは、マンゴスチンです。マンゴスチンは、形も大きさも、へたのあることまで、かきによくにているのです。そうして、だれにでもすかれるので、くだもの女王といわれています。

そのつぎのがナンカというものです。木になるくだものうちで、いちばん大きいといわれていますが、絵ではそんなに見えません。しかしほんとうは、ひじょうに大きくて、えだにさがることができないのか、太い幹からすぐぶらさがっているそうです。おもしろいでしょう。」

と、教えてくださいました。

めずらしい熱帯の家

この地方の家々には、わが国の農家によく似たものもありますが、そのほかいろいろ



スマトラの家

のめずらしい家もあります。

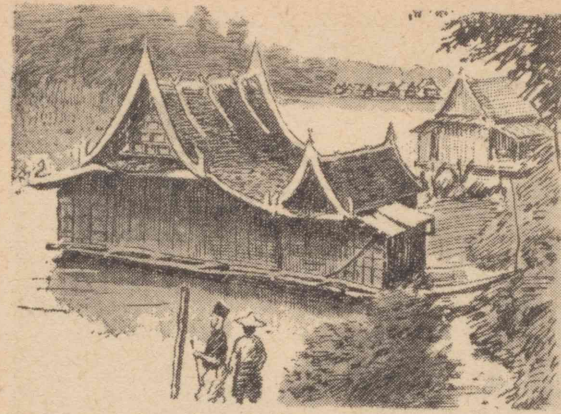
上の絵で見ると、ずいぶん屋根が高く急で、その上ゆかの高いのに気がつきませす。よく調べてみると、つぎのようなことがわかりました。

これは、雨季に雨が多く、川がはんらんするので、ゆかを高くしてそのひがいをさけたり、また、通風をよくしたりするためです。この高いゆかの下には、よくあひるやにわりがかわれています。

また、暑いところでは、いろいろな方法で、水上生活が行われています。

す。仏領インドシナの南部では、数本のぼらを水中に立てて、その上に家をつくるところもあります。

また、大きな川の河口では、船を家にして生活している人々もあります。これできくに有名なのは、中国のカントンやタイのバンコックです。



浮家

もつとおもしろいのは、メナム川沿岸の浮家です。この川は、おじさんに聞いたように、雨季になるとはらんするので、それにそなえてこのような家をつくっているのです。浮家というのは、いかにくんだ竹の上に、チーク材でつくつてある家です。チーク材は、かたくて水に強い木材で、この国からビルマにかけての山地にたくさん産します。この重いチーク材を山地でうんばんするのに、ぞうが使われています。

セレベス島の山地には、船の形をした大きな家があります。これは人の住む家ではなく、ものをしまっておくところだそうです。

また、海岸地方の町では、亭子脚ていしきゃくという特別の日よけをつくつているところもあります。

このように調べていくと、一年中暑いこの地方では、住居もいろいろとくふうされていることがわかりました。

ところが、こんな暑い地方でも、近代になって、いろいろな産業が開発されるにつれて、シンガポールなどのような近代的な都市が発達してきました。

また、この地方で特色のあるのは、インドのシムラヤ、ジャワのバンドンなどの、高

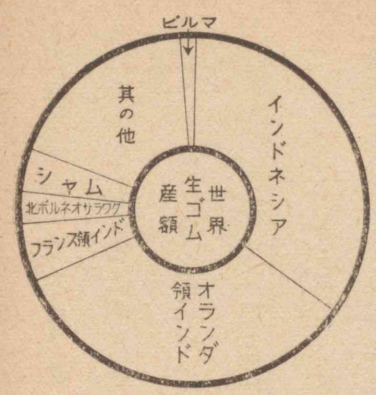


亭子脚のある町

原の都市でしよう。高地はずつとすずしいので、暑さをさけて、こうした西洋風の町がつくられているのです。

マライのゴム林

学校で毎日使う消しゴムや、ゴムまり、ゴムぐつをはじめ、自転車・自動車・飛行機のタイヤ、いろいろの電気器具などをつくるゴムのおもな産地は、マライやスマトラ島、



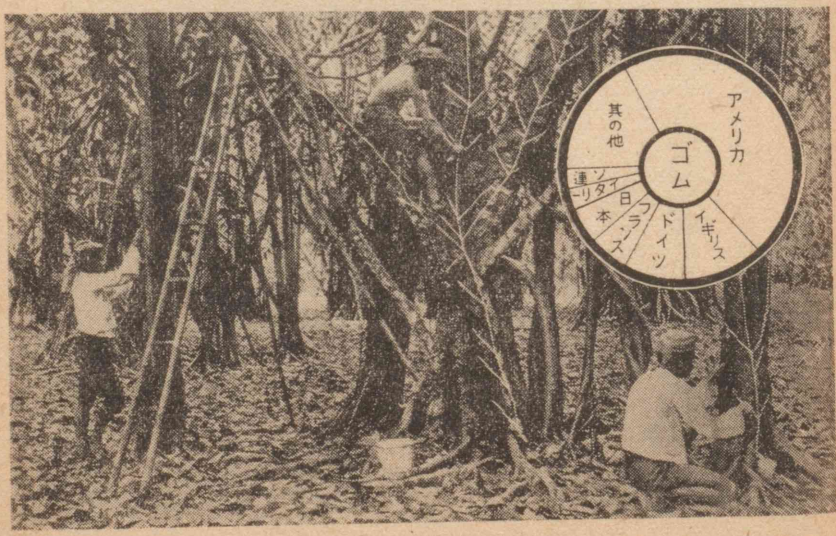
世界におけるゴムの産額

ボルネオ島などです。この地方で、世界のゴムの産額の約八十パーセントをしめています。この地方にこれほど多くのゴムがとれるのは、気温が高くて雨が多いからです。マライやスマトラ島には、美しいゴム林が十数キロメートルも続いているところがあります。ゴムをさいばいするには、まず、なえをつくってそれを山に植え、雑草をかりとって、たいせつに育て

ます。五年か六年たつて、幹の直径が十二センチメートルぐらいになると、ゴムをとりはじめます。三十年以上にもなると、よいゴムの液はとれないそうです。

ゴム液をとるには、絵のように、ゴムの木の幹にV字形のきずをつけます。そこから流れてるぎゆうにゆうのようなゴム液を、うつわに受けとります。こうしてたまつたゴム液は毎日バケツに集められ、工場に運ばれてゴムにされます。それをおもにイギリス、アメリカ、日本へ輸出するのです。

マライ半島のゴム園では頭に白い布を巻き、長い着物をまとつた人たちがゴム液をとつて



ゴム液の採取とゴムの消費国

いるところを見かけます。この着物をサロンというのだそうです。サロンは、暑いこの地方で、男にも女にも使われ、これは、世界中でも、かんたんな、しかも使いみちの多い便利な着物の一つだといわれています。



さとうきび畑

ゴムとやらんで有名な産物は、さとうきびです。世界のおもな産地は、ジャワやフィリッピン、キューバなどです。ジャワでは、土地が肥えているうえに、気候がさとうきびのさいばいに適しています。それに、かんがいも便利なので、中部から東部にかけて、たくさんさとうきびがさい

ばいされています。また、品種の改良やさいばい法もよく研究されているので、同じ面積からとれるさとうの量は、フィリッピンやキューバよりも、ずっと多いそうです。ひろびろとしたさとうきびの畑の中には、近代式の大きな製糖工場せいとうが見られます。

石油も、スマトラやボルネオの油田からたくさんとれます。しかし、鉱産物で世界に有名なのは、マライ半島のすずです。すずがかんづめ工業や自動車工業にたいせつであることは、いうまでもありません。その産額は世界の半分をしめています。



ゴムの利用

学習の手びき

- 一、世界の米の産地の地図をかいて、米のできる国々の産額を棒グラフにあらわしてみましよう。この地図やグラフから、どんなことがわかりますか。わかつたことをまとめましよう。
- 二、わが国は、アジアの季節風帯にあるので、このえいきょうをうけることが多いのです。夏の季節風と冬の季節風が、どんなにわが国にやってくるかについて、いままで調べたことをまとめましよう。
- 三、陸風と海風とは、海岸地方であつたらどこでもみられます。この風がわたくしたちの生活に、どんなえいきょうをあたえているか調べてみましょう。
- 四、わが国の気候で、特色のあるものには、台風があります。この台風は、わたくしたちの生活に、どんなえいきょうをあたえているでしょう。
- 五、世界のゴム生産地の大部分は、マライ地方でしたね。ここで産出されるゴムは、どの地方に送られていますか。また、わたくしたちの生活と、どんな関係があるか調べてごらん下さい。
- 六、世界には、このマライ地方のほかにも、熱帯の国々がありますね。こんな地方では、どんな生活が見られるでしょう。参考書によって調べてごらん下さい。

四 寒い地方の生活

(一) 冬のおとずれ

勉強をおえた春雄くんは、

「おお、寒い。」

と、つぶやきながら、火ばちのそばによつてきました。それを聞いたおじいさんは、

「春雄、そんなに寒いのかい。」

と、いいながら、読みさしの新聞をおいて、春雄くんを見ました。

「ええ、とても寒い。なんだか、ゆうべのラジオの天気予報があつたようですね。」

春雄くんは、こういつて、火ばちに手をかざしました。

「このくらいの寒さに負けるようではだめだな。東北地方や、北海道へいつてごらんよ。」

もつともつと寒いんだよ。それでも、子どもたちは、元気で勉強もしているし、スキーや雪すべりなどもおもしろくやっているよ。」

「おじいさん、今おっしゃった地方は、そんなに寒いんですか。」

春雄くんがこうたずねますと、おじいさんはにこにこしながら、

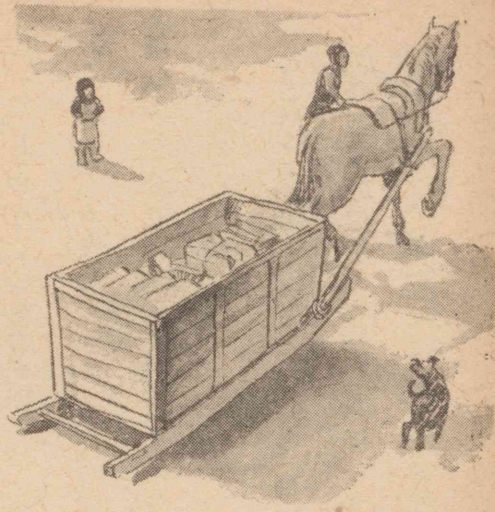
「こちらに比べると、ずっと寒いし、雪も多いね。わたくしが旅行したのは、二十年も前のことだが、よくおぼえているよ。」

と、いいました。

「あ、そうそう。おじいさんは、あちらの方へ旅行なさったことがあるんですってね。おじいさん、その雪国のようすを話してくれませんか。」



スキーをしている少年少女



そりによる荷物の運ばん

春雄くんは、こういって、さつそく地図をだしてきました。

「ほほう、用意がいいね。じゃ、まず、最上川はどこにあったかな、みつけてごらん。」

「山形県にあるのでしよう。五年生の時、木下くんといっしょに調べたことがあります。」

「なかなか調べがい

いね。おじいさんは、一月ごろ、その最上川にそつて日本海方面へ出たのだったが、その地方で、いちばん雪の多いところは新庄盆地だったかな。自動車で町の中を通れるのは、山形盆地ぐらいのもので、そのほかは、乗物というとはこそりか



うまぞり

スキーぐらいのもだったよ。」

「はこぞりというと、どんな形のものですか。」

「まあ、一口にいうと、人力車の車をとったような形のはこで、ふつうはあとおして進むのだよ。お客はかがんで乗らねばならぬいし、きゆうくつなものだね。——北海道などでは、うまぞりがあるそうだよ。」

「といって、おじいさんは、うまぞりの絵を見せてくれました。」

「ところで春雄、おもしろいところは、福島盆地と米沢盆地との分水界になっている、板谷峠だね。福島盆地は雪がまばらだったが、このふきんにくると雪も深く、停車場

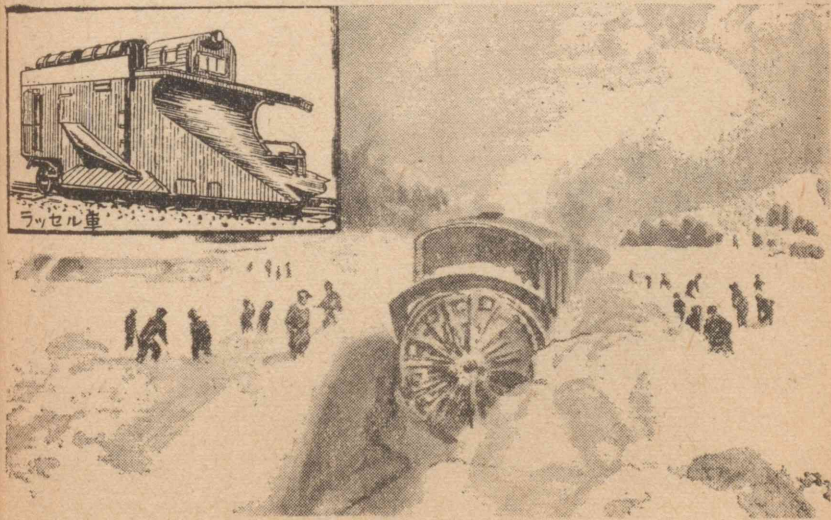
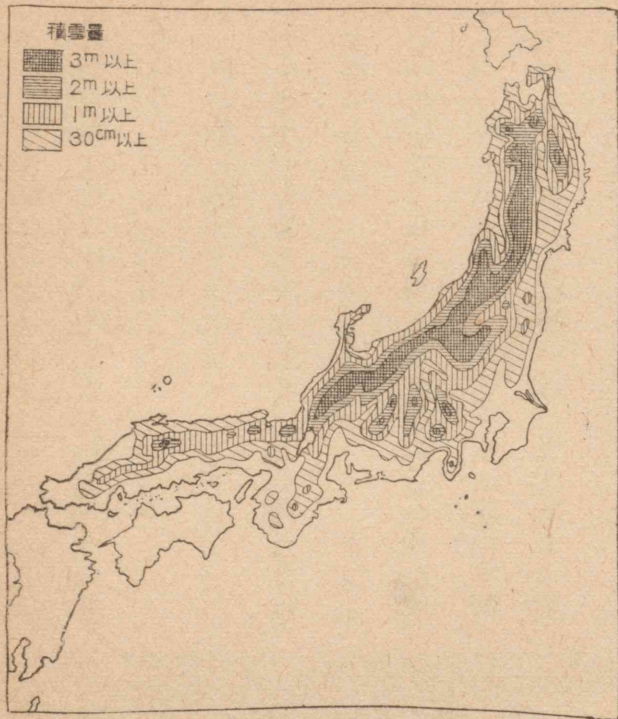
には、雪よけの人がたくさんいたよ。米沢盆地にはいると、家々には雪よけのかきねも高くつくってあってね。——」

すると、地図に見入っていた春雄くんは、きゆうに大きな声でたずねました。

「おじいさん、福島盆地と米沢盆地とは、あまりはなれていないのに、どうしてそれほどちがっているのですか。」

「いいところに気がついたね。よく考えてごらん。」

しばらく考えてから春雄くんは「あ、わかった。山脈の関係でしょう。冬はシベリア大陸から、北西の季節風がふいてきて、そ



ロータリー式除雪車と除雪作業

れが奥羽山脈にあたるので、その山ふところの米沢盆地では、たくさん雪がふるのでしよう。」

と、いいました。

「そうそう、そのとおりだよ。よく考えたね。」

それに——」

といいかけて、ちょっと考えたおじいさんは、

「もつと最上川をくだって、下流の庄内平野

へいくと、ふぶきは強いが、雪はあまり積

もっていないよ。」

「すると、雪の積もり方は、同じ地方でも、ところによつてずいぶんちがうのですね。」

「そうだなあ。それにしても、春雄、日本で雪の深いところといったら、どこだろうね。」

春雄くんは、しきりに首をかたむけていましたが、わかりません。すると、おじいさ

んは、地図をゆびさしながら、

「新潟県の高田市ふきんだよ。ここはむかしから、「この下に高田町あり。」というたてふ

だを立てたというほど、雪が深いので有名

だね。ことに、このへんのおく地では、八

メートル近くも積もったことがあるそうだと、

いいました。

「ほう、八メートルですか。そんなに雪深い

ところでは、いききもできないでしょうね。」

「ところがね、春雄。こんなに雪が深くても、

ちゃんといききできるようにくふうされて

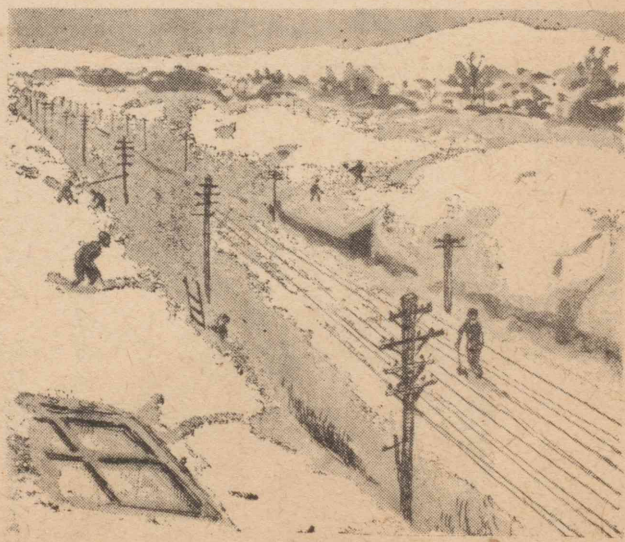
いるから、おもしろいよ。」

「何か特別なものでもつくつてあるんですか。」

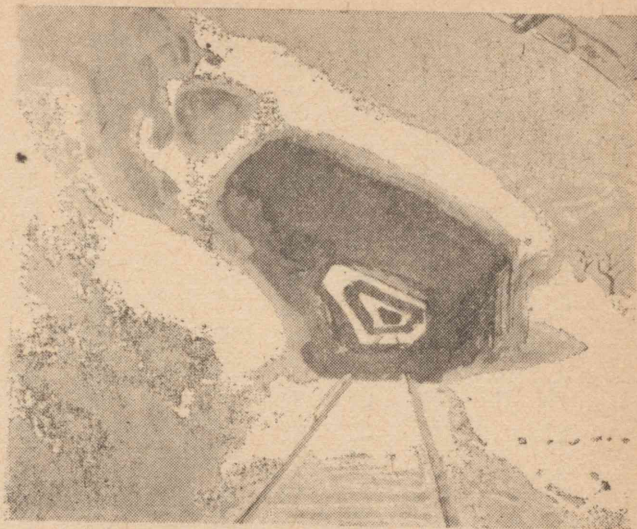
「そう。町には、がん木といってね、ちょう



がん木の歩道（長岡）



高田市の積雪



防雪トンネル

ど、家のひさしのようなものをつくって、その下を歩くようにしてある。まあ、雪よけの歩道だね。でも、これはまた、雨の日や、ふだんでも使えるし、なかなか便利だよ。中でも、長岡や高田のがん木は有名だな。」

「そんなに雪が深いと、汽車もたいへんでしようね。」

「そうとも。しかし、それだけによくくふうしてあるね。除雪用の機関車も使っているし、防雪トンネルなどもつくってあるからな。」

「やはり、よくくふうしてあるんですね。」

「おじいさん、すると、このへんの雪の深いところが、やっぱり日本でいちばん寒いところになるのでしょう。」

と、たずねました。

「さあ、それはどうかな。雪が多いからいちばん寒いとは、いちがいにいえないだろう。日本でも、北海道などはもつと寒いからね。—— そうだ、寒いといえば、シベリアでは、零下^{れいか}なん十度もさがるということだよ。」

春雄くんには、零下なん十度という寒さは見当がつきません。

「そんな寒さって、いったいどんなものでしょうね。」

「うん、私にも、それがどんなに寒いか、よくわからないなあ。そうそう、となりの小林のおじいさんは、もとハバロフスクの領事館におつとめだったね。おじいさんにお聞きすると、あちらのようすもよくわかるだろう。」

おじいさんは、こういつてくれました。

春雄くんは、「そうだ、小林のおじいさんがおひまのとき、たずねてみよう。」と思ひながら、地図をしまいました。

(二) 寒い土地の人々



シベリア東部図

春雄くんは、つぎの日曜日の午後、小林のおじさんをたずねました。

客間に通された春雄くんは、火ばちにあたりながら、しばらく学校のようすを話していましたが、

「おじさん、きょうは、シベリア方面のようすを、いろいろおうかがいしたいと思ってきましたが――」

と、話しかけました。

すると、おじさんは、
「こんなに寒いと、ほんとうにあちらの

ことを思い出しますね。」

といいながら、いろいろ話してくれました。

シベリアの冬

「さあ、何から話してあげようかね。」

「おじさん、シベリアは、とても寒いところだそうですが、冬はどんなにしてすごすのですか。」

「そうですね。冬といえば、すぐペーチカを思い出しますよ。わたくしたちは、炭火をおこしたり、こたつをいれたりしますがね。しかし、あちらでは、ストーブやペーチカを使っていますよ。」

「おじさん、ペーチカってどんなものですか。」

「さあ、どういったらいいかな――まあ、一口にいえばストーブを大きくしたようなもので、へや全体をあたためるようになっていきます。あちらの家では、へやとへやとの

間が、厚いかべになっていて、それに煙道えんどうがつくつてあるのですよ。そうして、これに石炭をたいて熱気を通すと、へや中があたたまるといわけですね。これを、ふうう、かべペーチカといっています。

それに、わすれてならないのは、あちらの家のつくり方ですよ。まどが小さく、ガラスも二重ばりで、その上、かべがとても厚いのです。これはみんな、寒さを防ぐためにくふうされたもので、へやがいちどあたたまると、火が消えたあとでも、なかなか冷えません。わたくしたちは、よく、シャツ一まいですごしたものですよ。」

この話を聞いた春雄くんは、ちよつと意外に思ったようです。

「おじさん、それでは、寒いと聞いたシベリアの冬も、住むのには、かえつ楽なわけですね。」

「へやの中はあたたかくしますからね。でも、一步外へでると、寒さはとてもきびしいですよ。からだや手足は、防寒服でかためていますからいいのですが、外気にさらされてる顔のまゆ毛やはな毛はもとより、まつ毛までがおおってしまいます。なにしろ、わたくしのいたところでさえ、寒さのいちばんきびしいときには、摂氏零下五〇度ぐらいまでさがったことがありましたよ。」

「零下五〇度ぐらいですって——」

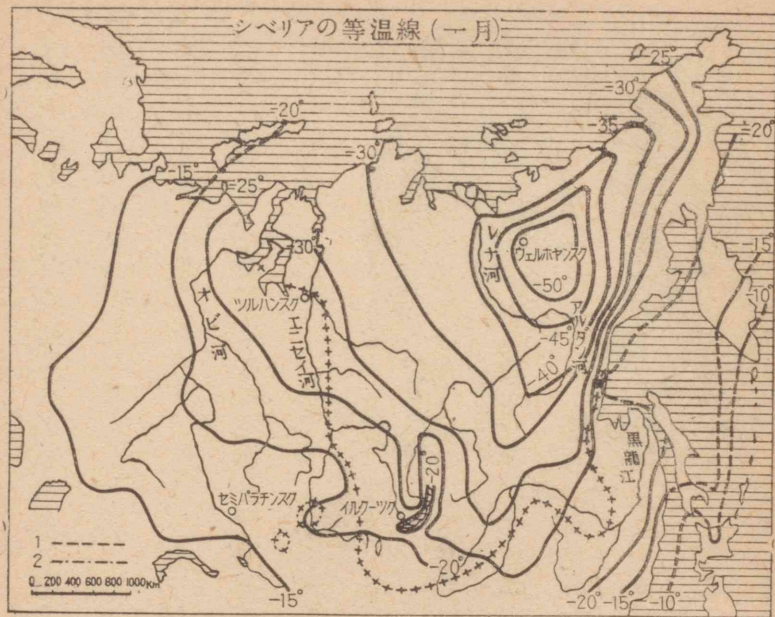
「そうですよ。でも、シベリアには、もつと寒いところがありますよ。」

と、いいながら、おじさんは地図をひらきました。



防寒服

「さあ、これを見てごらん。これで気温がどんなになっているかがわかるでしょう。東京の一月の平均気温は、だいたい三度ですね。ところが、この地方では、零下二〇度以下にくだるところが大部分です。ことに、ベルホヤンスクでは零下六九・七度という、世界最低の気温を示したとさえあるのですよ。わたくしたちには、ちよつと想像もつかないくらいですね。」



「おじさん、雪はどうですか。」
 「あ、雪ですか。こんなに寒いところだと、たいへん多いように思うでしょうがね。わたくしのいたハバロフスクふきんでは、それほどふりませんでしたよ。しかし、シベリアの西の方では、雪もかなりふるようですね。」
 話を聞いていくうちに、春雄くんは、シベリアの冬のようなすがだんだんわかってきましたが、寒いこの地方の土地のようすについて、もっと知りたいと思いました。そこで、
 「おじさん、シベリアの土地のようすは

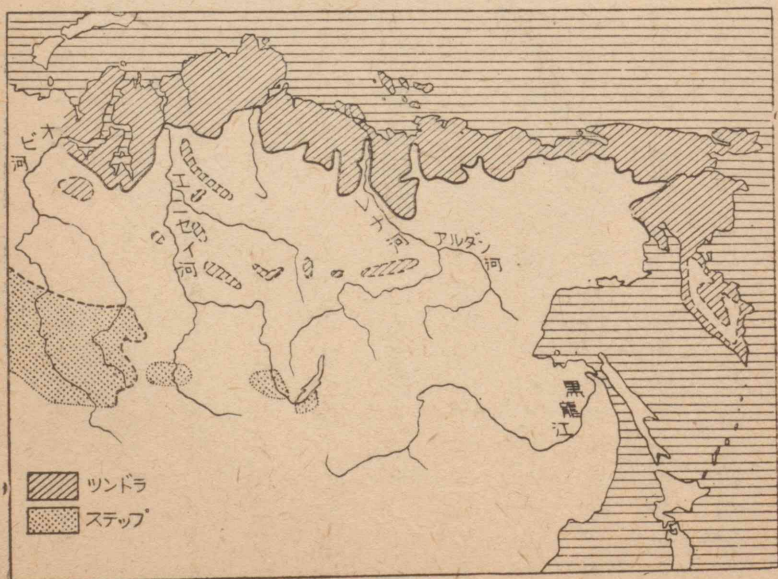
どうですか。」

と、たずねました。

ツンドラとタイガ

「土地のようすですか。さあ、この地図を見てごらん。」

「だいたい、北緯六五度の線と、七〇度の線の間を、まがりながらはしっている線がありますね。これから北はツンドラ帯といって、大地がいちめんにおおっていますが、いっぱいにすぎごけなどのこけ類しかはえていないようなところですよ。」
 春雄くんは、はじめて聞いたおじさんの





シベリアの森林

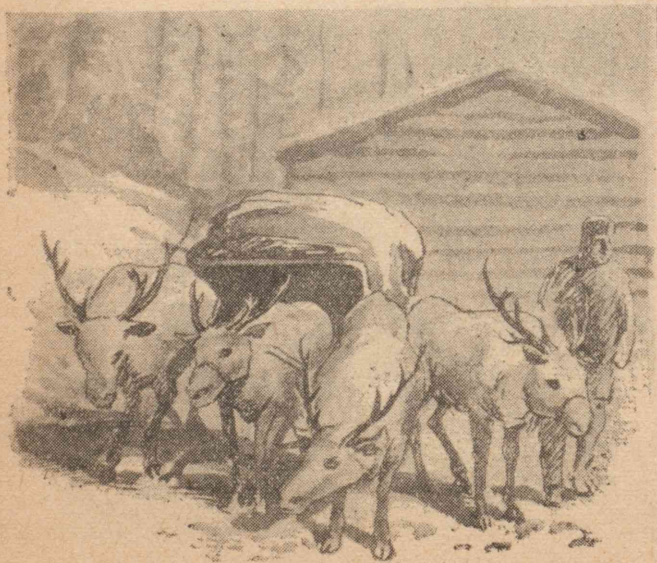
話におどろきました。

「ところで、このツンドラ帯から南の方へいくと、だんだん森林帯にうつりかわっていきます。これがタイガとよばれているところで、ここにはからまつやくろまつなどの寒帯性針葉樹しんようじゆが多くはえていますよ。しかし、このタイガの地中二、三メートルのところは、一年中こおりついているのですからね。そのために、木はたおれやすく、『たおれた木は、寒い気候のために、重なりあつたまま、なかなかさらないので。そうして、夏になって気温があがると、ここにたくさんかの蚊が発生するわけです。ときに、春雄くん、こんなツンドラ帯やタイガにも、やはり人は住んでいるのですよ。」

「ここまで聞いた春雄くんは、きゆうにたずねました。」

「そんなツンドラ帯やタイガでは、農業はできないわけですね。それでこの地方の人々は、どんなにして生活しているのですか。」

「そうそう、こんな土地では、とても作物は育たないわけですね。まあ、人が住んでいるといっても、ごく少ないだろうというところは想像されるでしょう。それにしても、これらの人々が、どのようにして生活しているだろうかということ、これだけでもふしぎに思うことですね。これについて、わすれてならないのは、いろいろな動物が多いということですよ。ま



となかいによる物のうんばん

あ、この絵を見てごらん。

こういって、おじさんは別の絵を見せてくれました。

「これは、となかいが物を運んでいるところですね。」

「そうです。このとなかいは、人を乗せたり、物を運んだりするだけでなくて、その肉やちちは食料になっています。また、皮も、テントや衣類に使われますから、ツンドラ帯に住む人々にとって、なくてはならないものです。こんなわけで、人々はみんなとなかいをかっていますよ。」

「となかいのほかには、家畜かちくはいないのでですか。」

「そうですよ。こんな寒いところでは、ほかの家畜はとても生きてはいけないのです。」

ところが、このとなかいだけは、寒さにも強いし、すぎごけなどのこけ類をたべて生きています。

「となかいって、おもしろい家畜ですね——そうすると、となかいのいないところには、人も生活できないというわけですか。」

「そのとおりです。それだけに、この地方の人々は、となかいをだいにします。しかし、タイガには、きつねやくろてんなど、いい毛皮のとれる動物がたくさんいますよ。それで、人々はこれをとらえて生活しているのです。また、海には、あざらしやせい

うちや魚類などもいますから、夏になると、海岸や河口には、これらをとりにやってくる人々のテントも見られるそうですよ。」

この話をきいて、春雄くんには、シベリアのようすがわかってきたようです。



せいうち



タイガ内のくま

夏のシベリア

おじさんの話を聞いていくうちに、春雄くんは、シベリアの夏のようにも知りたいたいと思えました。

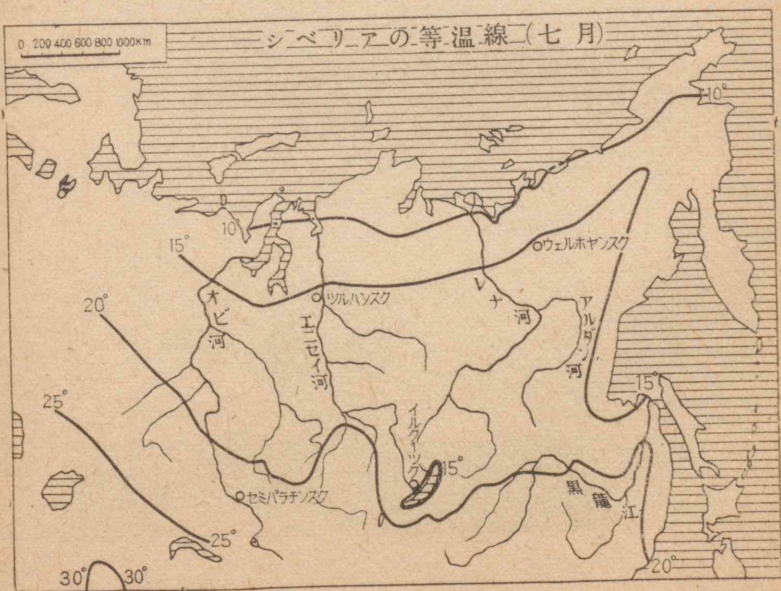
おかしをいただいてから、春雄くんは、続いて話しかけました。

「おじさん、シベリアの夏はどうですか。」

「シベリアの夏ですか。これはまたかわっていますよ。さあ、この図を見てごらん。」

こういつて、おじさんは、夏の等温線図を見せながら、話してくれました。

「四・五月になると、地表の雪や川の氷もとけはじめて、シベリアにも春がおとずれま



す。でも、この春はごく短くて、すぐ夏になってしまうのです。この等温線図でもわかるように、摂氏一五度の線が、ヤクーツクの北方で北緯六〇度の線をこえているでしょう。さつき話した北緯六八度のふきんにあるベルホヤンスクでも、摂氏一五・五度を示していますね。夏と冬の気温の差が、八〇度以上もありますが、こんなにはなほだしいところは、世界のどこにも見られません。このことからでも、この地方がどんなにきよくたんな大陸性の気候であるかがわかるでしょう。」

「では、その夏の間に農業が行われるわけですね。」

「いいところに気がつきましたね。地表の雪や氷がとけた三・四か月の間を利用して、小麦やあま、野菜などをさいばいするのです。アムール川（黒龍江）の流域や、バイカル湖ふきんでは、あちこちに農場が見られます。また、西部の平原は、はやくからヨーロッパ人が移住してかいたくしたところで、今では大きな農業地帯になっています。春雄くんは、短い夏が、寒いこの地方にとってどんなにたいせつであるかが、だんだんはつきりしてきました。」

(三) さばくと草原

小林のおじさんから、寒い地方のようすをいろいろかがった春雄くんは、「シベリアの南にひろがる蒙古もんこのさばくや、草原のことも調べたい」と思つて、学校の帰りに図書館へいきました。

まず、さばくのようすから調べたいと思つて、いろいろさがしているうちに、つぎのようなゴビさばくの旅行記がみつかりました。

「ゴビさばくの旅行記」から

ふたたびわたくしたちは、はてしないさばくを、とぼとぼと進んでいくのだった。ゆくてのすな原はまだかぎりなく続き、すなをやくえんねつは、いよいよはげしくなってくる。一日一日わたくしたちの苦しみは増していく。

わたくしたちは、行進するらくだのかんかくが、だんだん大きくなっていくのを心

配していた。

はじめはいせいよくふっていた首も、ふらなくなった。もう、くらから鼻わへのつなも、一直線にのびている。ますます、らくだの歩みはにぶくなってくる。しまいはつかれきつて、たおれてはつなを切っていく。こうなると、わたくしたちは、いよいよこのさばくの船が難波しかかっていることを知るのである。

らくだがはじめたおれたときは、積んだ荷物をおろしてやって、ふたたび歩かせる。しかし、あと足の、毛のない内側に、あせをだしはじめると、もうだめなのである。

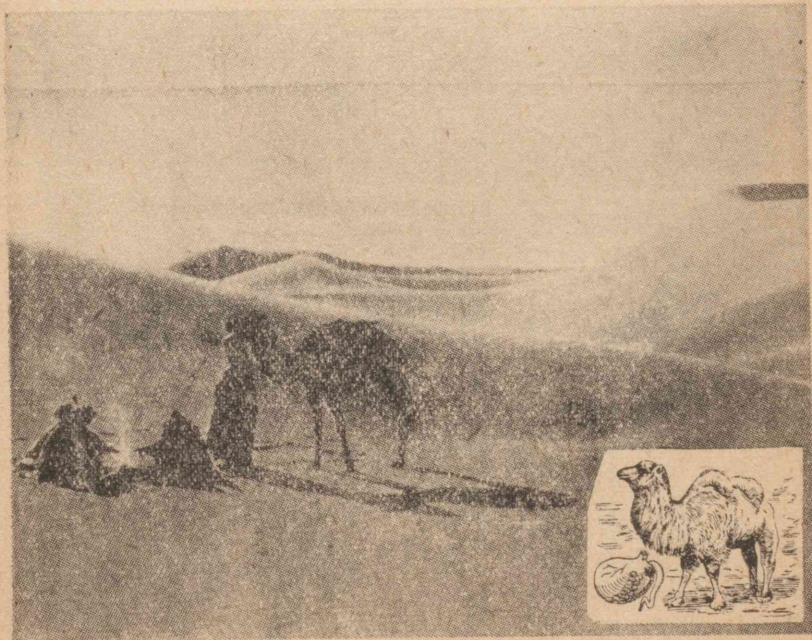


さばくを行進する隊商

わたくしたちは、らくだにも乗らないで、徒歩でいく。

朝、まだ暗いうちに、きしゅうラツパが野営でひびく。かすかな朝の光が東の地平線にあらわれるころ、もう、出発のじゅんびをするのである。このときが、一日の行進中、もつとも楽な時間である。

しかし、太陽が二・三時間すなをやきつけると、まもなく、わたくしたちの苦しさはあらたにはじまる。らくだが、ぼんやりした目で遠くを見るようになると、もういけない。



アフリカのサハラさばく

わたくしたちは、医者がかん者の体温をはかってみるように、らくだの列の歩き方がどれほどにぶつてきたか、たしかめようとして立ちどまる。

わたくしたちは、前進しなくてはならない。しかし、すべてのらくだがたおれるまで、つかれさせることはきけんである。

この旅行で、わたくしたちをおどろかしたのは、空中のしんきろうであった。あるとき、わたくしたちは、北西の方にそびえる大きな山を見た。その壮観に、わたくしたちは、すっかりほんものだと信じこんでしまった。ところが、山はとつぜん二つに分かれて、そのふもとはきゆうに消えてしまった。しかし、二つの高いみねは、空中にうかんだままであった。けつきよく、これらすべてのものの本体は、熱くふるえている、うす青色の空気にすぎなかつたのである。

春雄くんは、この旅行記を読みながら、今まで聞いたさばくの話や絵なども思いあわせて、いろいろなことを思い浮かべました。——木一本、草一本はえていないひろび

ろとしたさばく。長い行列を組んでいく隊商の一群。ゆくてにはてしなく続くすなおか。ときにはおこるはげしいつむじ風。また、旅人をおどろかす空中のしんきろう。しかし、それにしても、どうしてこのようなあれはてたさばくができているのだろうか。と、だんだんきもんがおきてきました。

そこで、春雄くんは、まず地図を開いて、この地方を調べてみることにしました。

ゴビさばくはすぐ見つかりましたが、もつとよく見ていると、ほかにタクラマカンさばくがあることに気がつきました。また、こうした二つのさばくのまわりには、たくさんの高い山脈や、高原があることも気がつきました。ゴビさばくや、タクラマカンさばくは、これらの高い山脈や高原によって囲まれています。

ことに、ヒマラヤ山脈が南の方にあつて、その北には大きな高原が続いています。

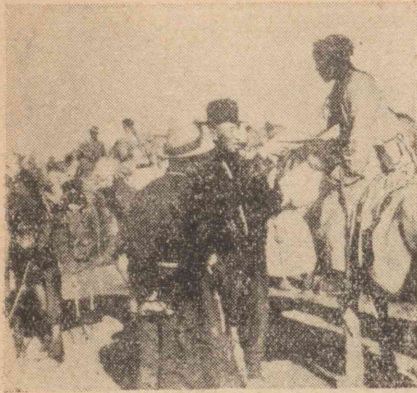
そのため、この前、調べたように、夏の季節風は、これによってさえぎられています。その上、海岸からも遠ざかっているので、海のえいきょうをうけることがないので、この地方は雨量も少なく、寒暑の差もはなはだしくて、さばくになったのでしよう。

遊牧の生活

春雄くんは、続いて、遊牧をしている人々のようすについて調べました。つぎの記録は、春雄くんがまとめたものです。

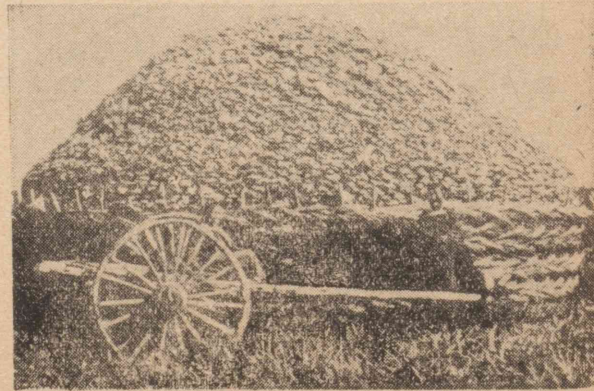
むかしから遊牧の生活をしている人々の多いところは、蒙古地方です。この写真は、湖のほとりに、緑の牧草をもとめて集まった、蒙古の人々の村落です。この写真で見ると、放牧された家畜のおもなものはひつじです。





蒙古人の服そう

また、おもしろいのは蒙古人の服装です。写真のよ
うに、見ただけでも、
あたたかそうな衣服
をまとっています。が、
これは、この地方の
寒い気候と、ふきつけるすなほこりを防ぐことから考
えられたものでしょう。
ところで、この地方の人々は、このように家畜にた



ぎゅうふんの山

ます。写真のように、山と積まれたぎゅうふんは、ち
よつとかわつた風景です。こういえば、「ぎゅうふんが
燃料になるなんて——」とも思われますが、草木の少
ないこの地方では、それほど燃料が不足しているの
です。



蒙古の村

ちようど、寒い地方の人々が、となくいに
たよって生活しているのと同じように、ひつ
じはこの地方にとつてなくてはならないもの
となっています。ちちや肉が食料になる上に、
毛皮は衣服やしんぐやテントなどに利用され
ています。
そのほか、やぎやうま、ひつじ、らくだな
どもかわれているようです。これらの家畜
は、ただ人々を乗せたり、荷物の運搬に使
われるだけでなくて、ちちや肉・毛皮が人々
の生活にかくことのできないものとなってい
ます。それに、家畜のふんが、冬季における
たいせつな燃料ねんりょうとなつているのにはおどろき



蒙古の市場に集まる人々

このバオは、夏には土地の低い草原に、冬にはおかの南側などのあたたかいしゃ面をえらんで、あちらこちらにつくられます。しかし、祭などのときには、いろいろな市が開かれるので、遠くから人々が集まってきて、たくさんのバオがたちならびます、そうして、この市では、毛皮や、日用品などの売買がなされるのです。



蒙古バオ

よって生活していながら、そのししく法はかんたんで、ほとんど改良しようともしません。ただ、自然の牧草をたよりにして、うつり動いているだけです。

こうした遊牧の生活をしているこの地方では、家のつくり方もいたってかんたんです。

上の写真で見られるように、放牧された家畜のそばには、まるい家がたてられています。これが蒙古バオといわれるもので、やなぎのえだを組んで骨組をつくり、ひつじの毛でつくった。イスキといわれる厚い布でおおって、その外側を、らくだの毛で

学習の手びき

- 一、世界で、寒い地方はどこでしょう。調べながら、その地方の生活の特色について まとめてみましょう
- 二、これらの地方と、わが国の寒い地方とをくらべると、どんなちがいがみられてきますか、調べてごらんなさう。
- 三、産物にめぐまれない寒地の人々は、どんな生活をしているでしょう。いろいろな参考書や、話を聞いてまとめましょう。
- 四、南極や北極といわれる地方は、なん回も探険されていますね。探検史を読みながら、その地方のようすを調べてごらんなさう。
- 五、遊牧の生活は、どうして行われるようになったのでしょうか。そのわけを考えながら、世界で遊牧の生活をしている人々の生活のようすについて、もっとくわしく調べてごらんなさう。
- 六、いろいろな気候のちがいから、わたくしたちの生活もだいぶんちがっていますね。これについて、とくに衣服のようす、食べものの保存と利用、家のつくりかたなどに、どんな特色がみられるか、まとめてみましょう。



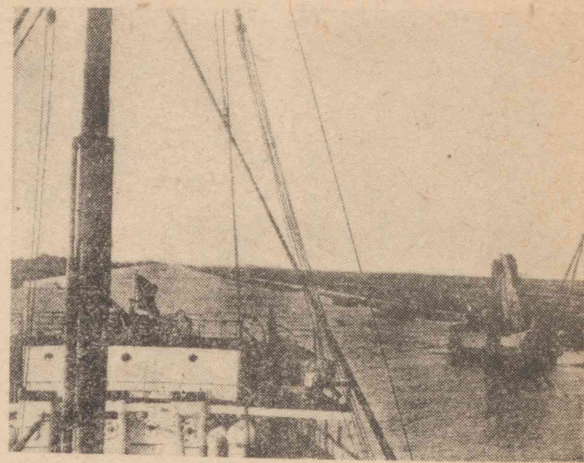
五 木村さんの話

この前から、貿易について調べている春雄くんの組では、こんど、木村さんからヨーロッパの話聞くことにしました。木村さんは、長く欧州航路おうしやうの船に乗っていたので、ヨーロッパのことがたいへんくわしいのだそうです。午後のはじまりのあいずで、みんな教室にはいつて待っていると、まもなく、木村さんがこられました。先生のしょうかいがすむと、木村さんはすぐに、ヨーロッパの話をはじめてくれました。

(一) 木村さんの話

地中海の船旅

まず、ヨーロッパへの入り口、スエズ運河のことからはじめましょう。



スエズ運河

長いインド洋の航海をおえると、船は、いよいよスエズ運河にさしかかります。このころになると、船客の思いは、もう遠くヨーロッパの国々にはしつています。

船の上から見たあたりの光景は、あれはたものです。運河の両側にはいちめんじさばくが続き、山々ははだかだ、ほとんど緑色など見ることができません。暑くて水のとほしいこの地方で、あらゆるこんなとたたかたつて、百六十

キロメートルのこの長い運河をつくった、人間の偉大な仕事には、まったくおどろくほかはありません。

この運河ができたために、アフリカの南たんを大まわりしていた、ヨーロッパ—アジアの航路は、四千マイルもちぢめられたのです。そうして、この運河を通る船は、一

年間に五千せきにのぼるそうです。これでも、そのおんけいがかどんなに大きいかがわかります。

運河の地中海への出口、ポートサイドの防波ていの上には、この運河建設の恩人、レセップスの銅像がたてられていて、静かにスエズ運河を見まもっているかのようです。この運河は、今から八十年あまり前に完成されたもので、パナマ運河とともに、世界の二大運河とされています。

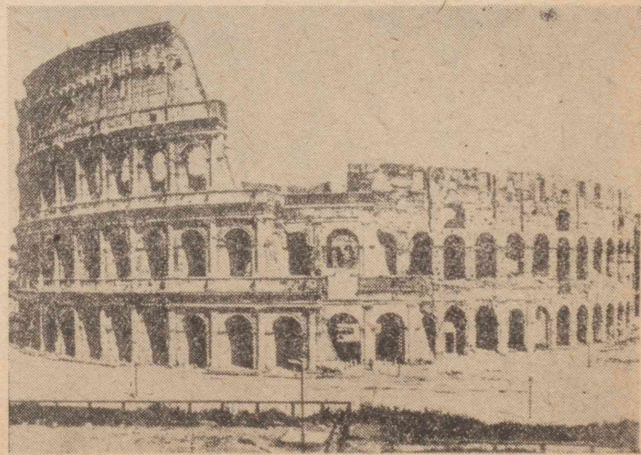
「暑さ寒さもスエズまで」ということばがあります。ありますが、ひとたび地中海にはいると、ほんとうに夏の国から春の国にはいった感



じがします。やけつくような紅海こうかいの暑さに比べ
ると、さわやかな空気や明かるい風光に、思わ
ず喜びの声をあげずにはいられません。これか
らまた、長い地中海の旅が続くのです。

この地中海の地方は、冬あたたかくて雨が多
く、夏は暑くて雨が少ないおもしろい気候です。
日本の気候に比べると、ずいぶんかわっている
と思うでしょう。これを地中海式の気候といっ
ています。

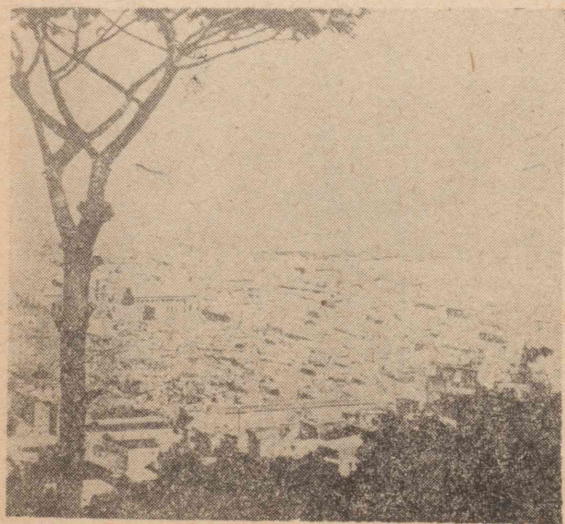
この沿岸の地方は、また早くから開けたとこ
ろです。ギリシャやローマなどの西洋の古い国々は、いずれもこの沿岸に栄えたのです。
今もギリシャやイタリアには、その遺跡いせきが残っていて、そのころの栄えたありさまを、
想像することができます。



ローマの遺跡（コロセウム）

地図をよく見ると、長ぐつのようにつきだしているイタリア半島に気がつくでしょう。
この半島を右に、エトナ火山を左にのぞみながら、メッシナ海峡をすぎると、船はまも
なくナポリにつきます。けむりをはくベスピアスの火山を東に、明かるい地中海を南に
かかえこんだ美しいこの町は、風景の美しい
港として世界に知られています。

こうして、船はイタリア半島の西方を走
ります。いままでの航海でも見られたのですが、
このあたりの山々や島々には、オリーブとぶ
どうの畑がいちめんに開けています。ことに
オリーブは、この地方ではわすれることので
きないものです。この木には、ずいぶん古い
のがあつて、中にはなん百年にもなるのがあ
るそうです。写真のように、はしごにのぼつ



ナポリ



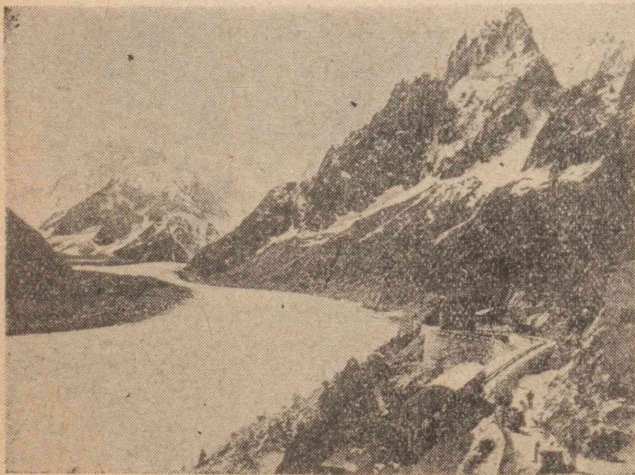
オリーブの採取

て実をとっているところもあります。オリーブはそのままでもたべますが主としてオリーブ油をとるのです。オリーブ油は食用にもなり、また、せっけん製造などの工業用にも使われます。コルシカ島をすぎて、マルセイユに近づくと、かさをひろげたようなかさまつのはえた、緑のおかや、白いすなはまの間に、美しいべっそうのならんでいるのが見えてきます。この一帯はリビエラの海岸といって、地中海でも、ことに気候の温和なところですから、保養・ゆうらんの客が一年中おとずれます。

また、このあたりから、アルプスの前山を望むことができますが、次の写真で見ると雄大な風景は、ずつとおくにはいらないと見られません。スイスが、この山中にある美しい風景の国であることは知っています。

マルセイユは、フランスの南の門戸で、港の設備もよくととのっています。ここをたつと、船はスペインのおきを航行します。オリーブの林やぶどう園はあいかわらず続いていますが、イタリアやフランスの海岸のにぎやかさに比べると、その景色は単調になってきます。やがて、船はジブラルタルに着くのです。ジブラルタルは、地中海の西の出口にあたるので、交通上たいせつな港になっています。

この港をすぎると、船は進路を北に変えて、ロンドンに向けて進むのです。では、つぎに、イギリスの話をするにいたしましょう。

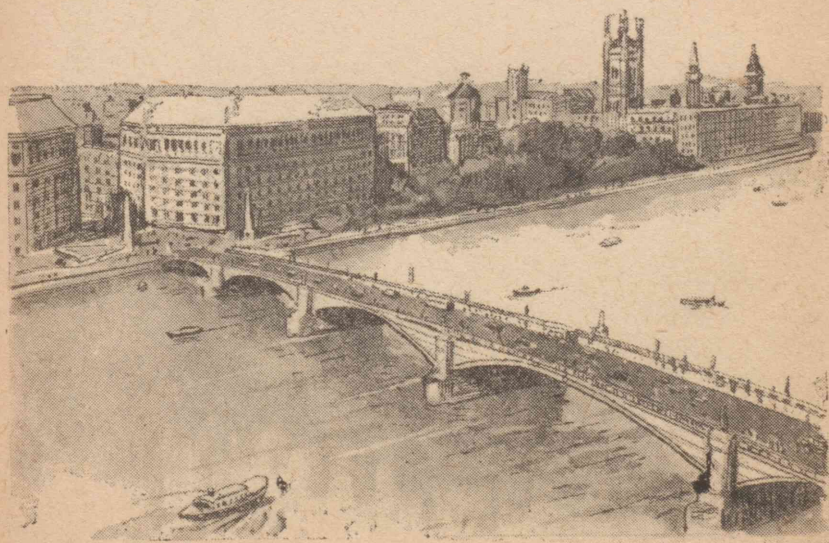


アルプスの最高ほうモンブラン

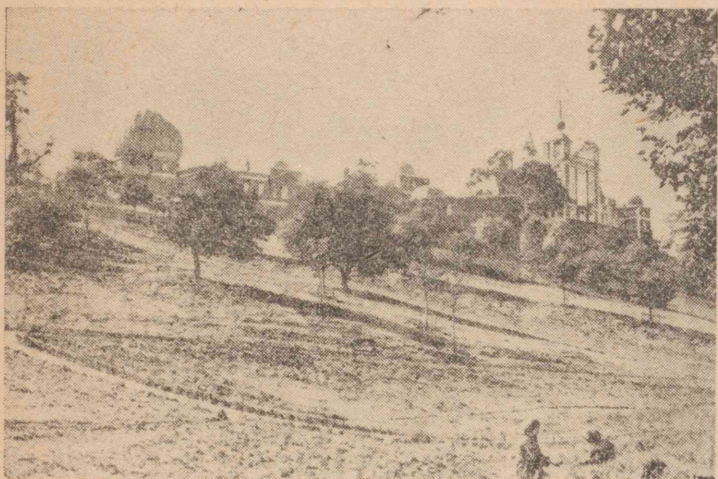
ロンドンからリバプールへ

これがロンドンの絵です。いままでの航海で見てきた都市に比べると、この町の大きなことにびつくりします。テムス川にはたくさんさんのドックがならんでいて、川には大小の汽船がいそがしそうに上下しています。

テムス川には、あの美しいタワーブリッジというつり橋や、大きなロンドン橋をはじめ、たくさんさんの橋がかけられています。古くてそうだいな議事堂や、たいかん式の間われるウエストミンスター寺院などは、いずれもこの川岸にそびえています。



テムス川のほとり



グリニッチ天文台

この町には、そのほか大英博物館や、バッキンガム宮殿など、見物するところが多いのです。名所をたずねるだけでも数日はかかります。グリニッチ天文台は、ロンドンの東のこうがいにあります。この天文台が、地図で東西の位置をしめす経線のもとになっていることは知っています。東経なん度、西経なん度というのは、ここをもとにして数えるのです。

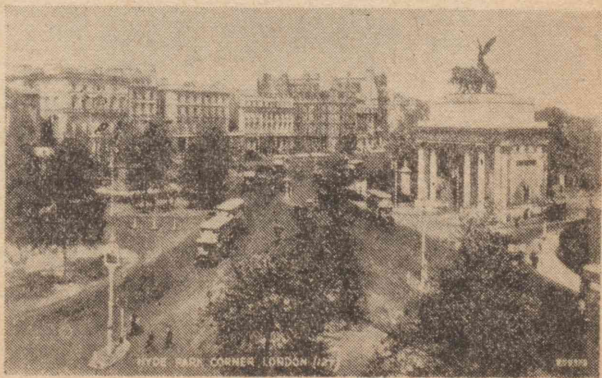
ロンドンの人口は、接続市街を合わせると、八百万に近いといわれています。じつに、この国全人口の約六分の一が、この町に集まっているかんじようになりますからおどろきます。この国には、そのほかたくさんさんの都市があって、都市に集まっている人口の多いことは、他国に

はちよつとみられないことです。

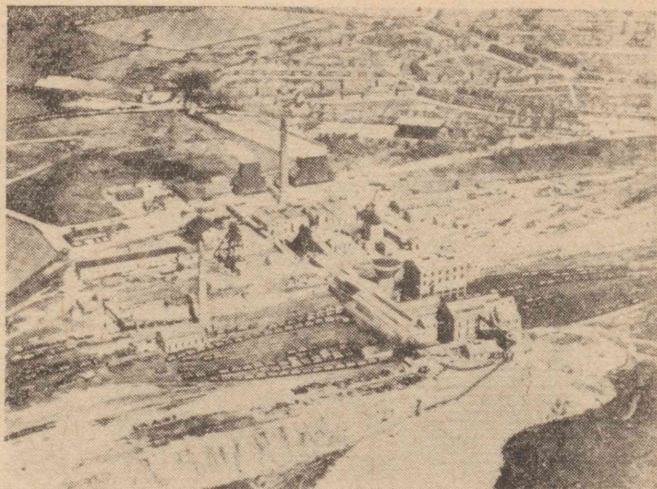
それから、ロンドンの天気について少し話しておきましょう。よく「きりの町ロンドン」といわれますが、ロンドンには、一年中くもりや雨の日が多く、快晴の日は少ないのです。ことに、冬のきりは有名で、このきりが深いときには、自動車はサイレンをならしながら地面をはうように動き、人の通行もとだえることさえあります。それで、この国の人たちは、快晴をとくに喜びます。春や夏の快晴の日には、一家そろって、楽しいドライブやハイキングにでかけます。市中では、

ハイドパークなどの公園の散歩や乗馬にしたしむ人々をよく見かけたものです。

ロンドンをこの国の東のまどとすれば、西のまどはリバプールです。ロンドンから、汽車で四時間たらずで着くことができます。



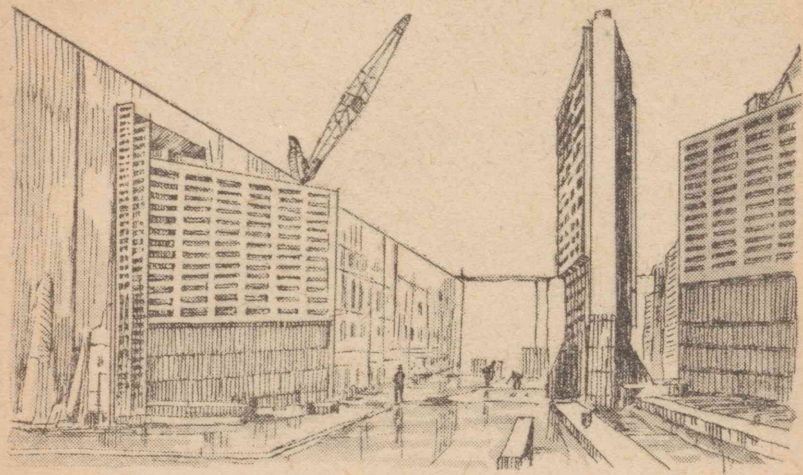
ハイドパーク



カーディフ炭田

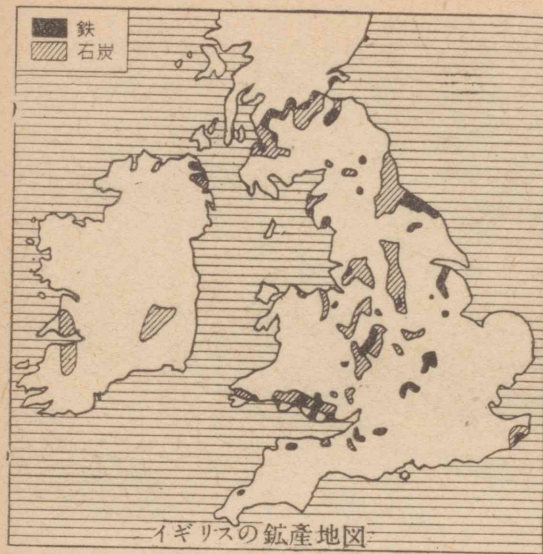
わたくしも汽車でリバプールへ旅行したのですが、汽車がロンドンの町をはなれると、静かな農村が続きます。きれいな緑の草におおわれた牧場や、その間にまじる小麦畑、小川のせせらぐイングランドの農村のながめは、また美しいものです。平野をすぎて小高いおかにさしかかると、ポプラにとり囲まれた教会を見かけたりするのも、この国らしい風景です。汽車が西に進むにつれて、このよらかな平地とおかの景色がかわるがわるやってきます。

バーミンガムは、この鉄道沿線の中ほどにある都市です。この町の製鉄所は有名で、立ちならぶえんとつからはきだすけむりのために上空は、黒くにごっています。わが国



リバプールの大ドック

この港は、後方に大工業地帯をひかえていますので、原料や食料を輸入し、製品を輸出する役目をもっています。それに、海上交通のさかんな大西洋に面していて、アメリカやその他の国とのれんらくにもよいので、貿易額はロンドンと一・二を争っているほどです。



の八幡^{ヤハタ}の製鉄所を大きくしたようなものです。このふぎんの山地は、ペンニン山脈の南部にあたっています。バーミンガムからずつと北部一帯が、この国の工業地帯になっていて、毛織物のヨークシャーと綿織物のランカシャーの両州は、そのしんぞう部になっているのです。

ここで、この国の工業が、こんなにさかんなったわけを、かんたんに話しておきましょう。それには、ペンニンの山地から多くの鉄と石炭がでることを、まずあげねばなりません。工業の発達にたいせつな鉄や石炭が、同じような地方から産出することは、たいへんつごうのよいことです。

そのうえ、この国の人たちは、ワットやアークライトの名でも知られているように、研究心

が深く、進んだ科学の力ではやくから機械を發明して、これを実地に応用したことをわすれてはなりません。

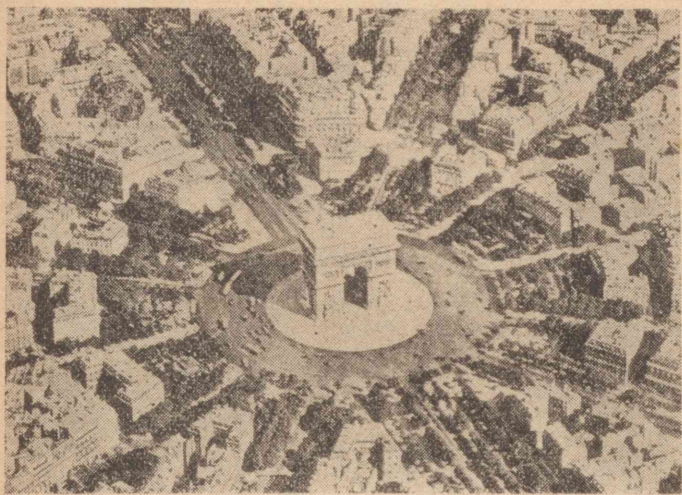
リバプールの港につくと、マーシー川の河口には、大洋航路の大きな船がいくそうもろかんでいます。

美しい都パリ

地図で見ると、イギリスとフランスとの間には、イギリス海峡があつて、かなりはなれているように見えます。

ところが、この海峡のいちばんせまくなったドーバーとカレーとの間は、わずかに四十キロメートルあまりです。汽船でロンドンを朝の九時にたてば、その日の午後五時ごろには、もうパリにつくことができます。飛行機だったら一時間もかかりません。

パリは美しい町です。がいせん門を中心とした放射状のいろいろはみごとなもので、ことに有名なのは、マロニエのなみ木のある、はば百二十メートルのシャンゼリゼーの大通りです。



パリの市街

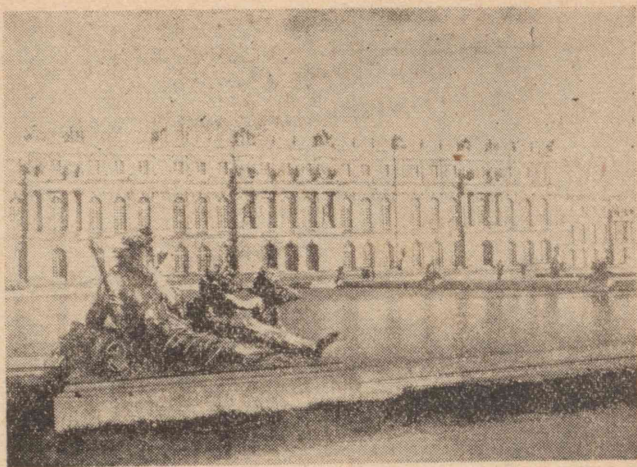
美しい建物と、緑の公園にみたされたパリは

「花の都」の名にはじません。

また、パリは「芸術の都」ともいわれていきます。ルーブル博物館や美術館などがあつて、各国から美術や音楽の研究のために、留学する人も多いのです。高くそびえるエッフェル塔やそうだいなノートルダム寺院などの名所も、人に知られています。

この町の人口は、約三百万です。市の中央にはセーヌ川が流れています。この川に船をうかべて、夕ぐれ、静かなパリをながめるのも、またよいものです。市の南西のこうがいは、ルイ十四世の建てた美しいベルサイユ宮殿があつて、公園地帯になっています。

また、パリは、ほぼ国の中心にあつていまして、各地方とのれんらくにたいへん



ベルサイユ宮殿

つごうがよく、フランス旅行の根拠としても
いいところです。

このパリの町から、一步こうがいにてますと、
静かな農村がひろがっています。この国は、じ
つによく農業の発達した国で、総面積の四十パ
ーセントぐらいが耕地となっています。小
麦やてんさい、ぶどうなどがおもな作物です。
小麦の産額は、ソビエトをのぞくヨーロッパ諸
國中、第一となっています。



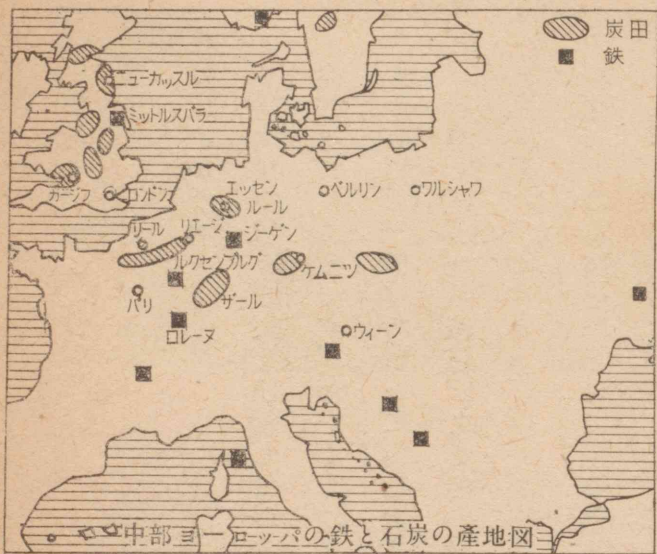
ぶどう園に働く人々

パリのまわりには、これをとりに囲むようない
くつもの丘陵きゅうりょうがあります。土地の人たちは、そ
の丘陵の日あたりのよいところを見はからつていちめん**ぶどう**をつくっています。初
夏に、パリからこうがいへでると、楽しそうなぶどうのしゅうかく風景によくであうこ
とがあります。

南フランスへ汽車の旅をしても、やはり、ずつとぶどう園が開けていることにびつ
りします。とくに、ガロンヌ川の流域にはぶどう園が広く開けていて、ボルドーは、そ
の集散地となっています。フランスのぶど
うは、味も産額も世界一といわれています、
おもにぶどう酒につくられるのです。

パリから、東へ旅行しますと、静かな農
村から、だんだんにぎやかな工業地帯に
はいつていきます。

東部フランスも、鉄や石炭の産が多いの
で、やはりいろいろの工業が発達している
のです。ライン川を中心とした地方は、ヨ
ーロッパで工業のさかんな地方で、ここは



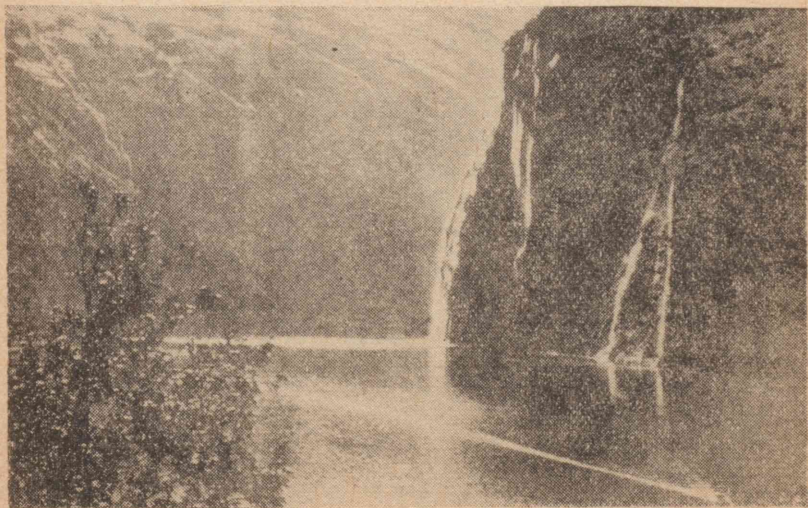
中部ヨーロッパの鉄と石炭の産地図

その一部なのです。

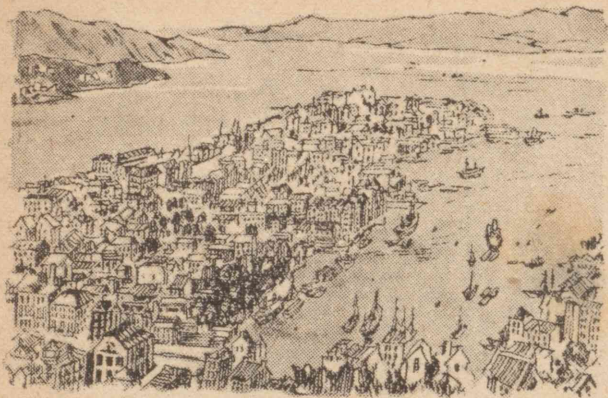
北の国ノルウェー

ヨーロッパの国々で、ぜひ話しておきたいのはノルウェーのことです。わたくしはとうとういきませんでした。あちらにいるとき、この国をおとずれた人たちから、よくその旅行話を聞いたものです。

ノルウェーの地図をひらいて見ると、ていり
の多い海岸にすぐ気がつくでしょう。これがノ
ルウェーのフィヨルドです。この風景を見るた
めに、ゆうらん船に乗りこんで湾の中にはいつ
ていくと、湾はせまく長く続いていて、ちょう



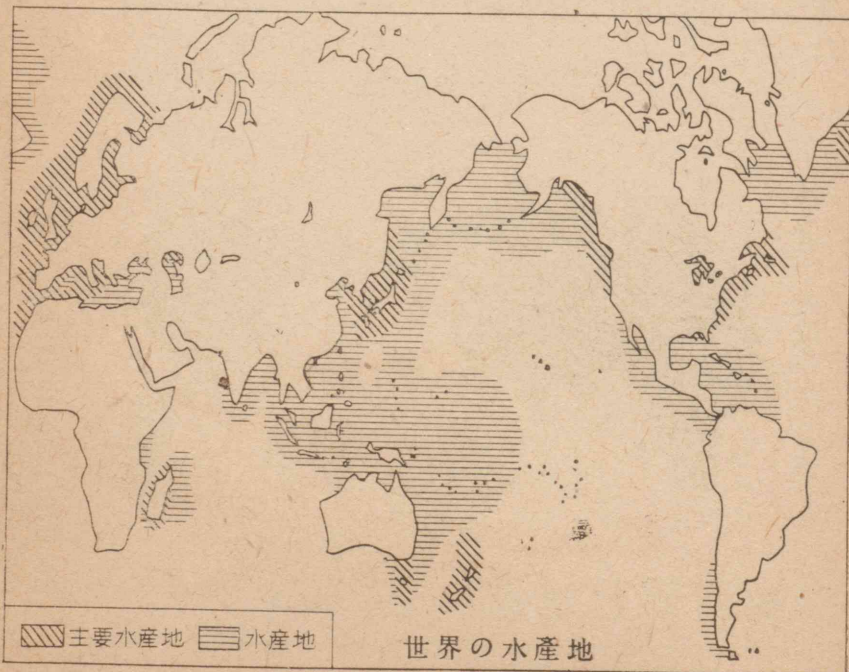
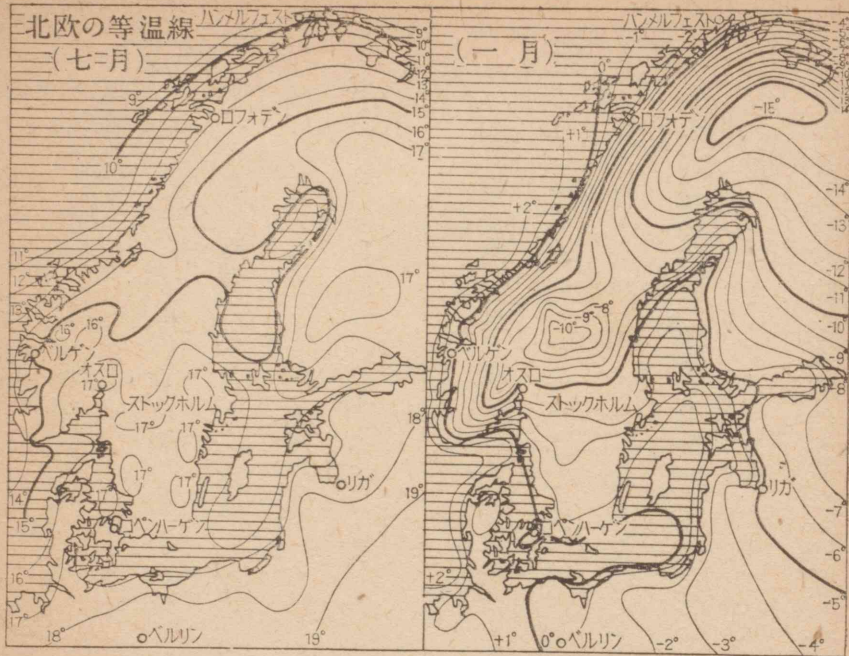
フィヨルド



ベルゲンの港

ど川を航行しているようです。湾のおくのぜつべきの上には、氷河があり、たきがかか
っています。秋の夕ぐれにここをおとずれると、木々のもみじが、青々とした海の水に
うつつて、その美しさはたとえようもないそうです。このフィヨルドは、この地方が氷
河におおわれていた時代に、氷河のために谷が深くけ
ずられて、それに海の水がしん入してできたものです。
上の絵は、フィヨルドの海岸にある、この国第二の
町、ベルゲンの港です。この町は有名な漁港で、港内
には漁船のほばしらが、まるで林のように立ちならん
でいるそうです。平地の少ないフィヨルドの海岸では、
このベルゲンのようにせまい平地をみつけて、漁港を
発達させているのです。

この国の近海は、北海道近海や北アメリカのニュー
フォンドランドの近海とならんで、世界の三大漁場と

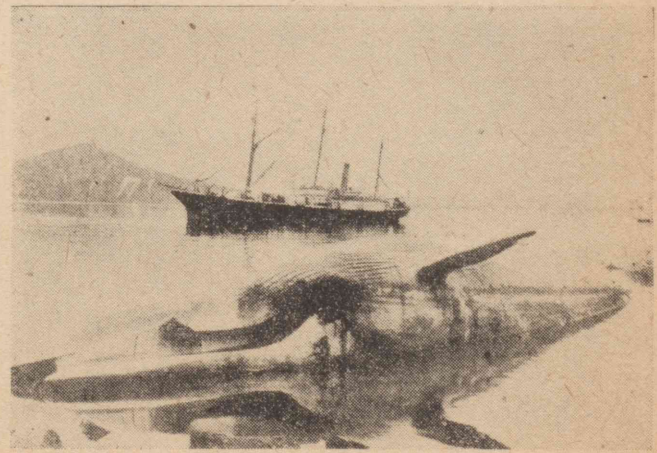


されているほどです。たらやにしんがよくとれま
 すが、ことにたら一本づりは、この国の漁夫た
 ちが得意とするところだそうです。

このように高緯度のこの地方の近海で、漁業が
 さかんなのは、西のおきを流れるメキシコ暖流の
 ために、冬でも海がこおらないばかりでなく、ふ
 きんによい漁場があるからです。

また、漁業で話しておかねばならないのは、捕
 鯨船です。この国の人たちは、遠く南極洋まで乗
 りだして、世界一捕鯨国となっています。こ
 うして、水産業は林業とともに、この国のいちばんにたいせつな産業になっています。

それに、この国の商船隊のかつやくもすばらしく、汽船の多いことでも、イギリスや
 アメリカについています。

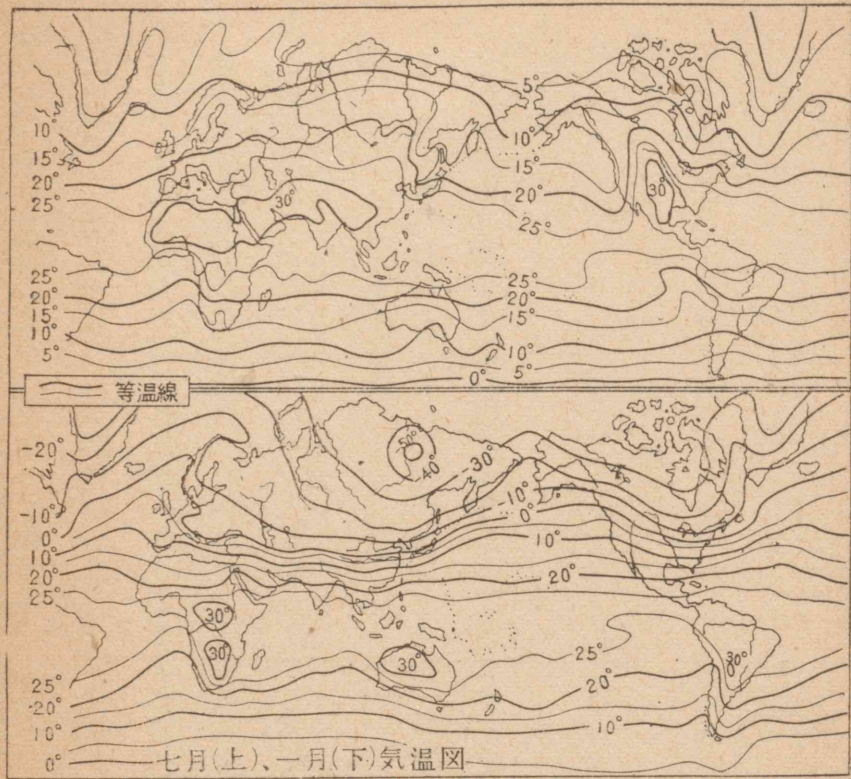
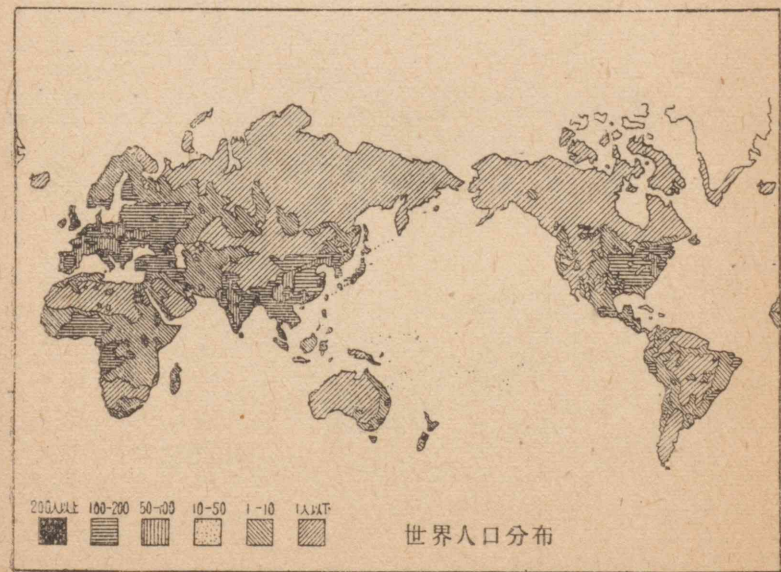


捕鯨船

(二) 春雄のまとめ

いままで、いろいろな地方の生活について調べてきた春雄くんは、「人はどこに多く住んでいるだろうか。」と考えました。そこで、世界の人口分布について調べてみました。

人口分布図を見て気のことしたことは、人口の多い地方がいくつかあることです。とくにアジアの南東部とヨーロッパ、それに北アメリカの東部には、黒い点がかたまっています。人口表を見ると、アジアとヨーロッパを合わせた人口は、約十五億になっていて、世界全



体の約四分の三が、この両州に住んでいることになります。だんだん調べてわかったことは人口密度の高い地方が、いずれも温帯にあるということですね。ヨーロッパや東南アジア、アメリカの東部を結んでいくと、それが帯のようになります。ただ、アジアでは、この帯が南の方にたれています。南半球でも、南アメリカやオーストラリアの東部・アルゼンチンなどの人口の多い地方をつ

なぐと、やはり帯のようになるのです。

これほど、この地方に人口が多いのは、この温帯が人間の活動に適し、産物も多いためだろうと考えました。これに比べて、いままで調べてきた寒い土地やさばくの地方などは、気候が人間の生活に適しないので、住む人も少ないわけです。このように気候がちが土地がことなるにつれて、人間の生活のしかたに、いろいろのちがいができてくるわけです。

それに、世界にはたくさん国がありますが、こうした気候や土地のちがいととも、いずれも国の歴史や文化の程度もちがっています。それで、かわった生活がみられるわけです。

学習の手びき

- 一、レセップスの伝記を読んでみましょう。スエズ運河の大工事の苦心がよくわかるでしょう。また、パナマ運河についても調べましょう。
- 二、木村さんのお話の順路を地図にあらわして、話の中にできた土地の産物や建物などを書きこみ、きれいな地図をつくってみましょう。
- 三、ヨーロッパには、たくさん国がありますね。どんな国があるか調べて、国別の地図をつくってごらんねさう。
- 四、ヨーロッパの地勢図や気候図を書き、ヨーロッパの自然についてもっと研究してみましょう。
- 五、地中海沿岸のイタリアと、大西洋上のイギリスでは、その産物がどんなにちがっているか、くらべながら調べましょう。
- 六、大西洋は、アメリカとヨーロッパの間にひろがっているので、海上交通のきわめてさかんな海です。その航路や港について調べましょう。
- 七、世界には、どんな大都市があるか。人口はどれくらいあるかななどを調べて、グラフや分布図をつくりましょう。

さくいん

一、この本にでてくることがらや人名、地名などから、たいせつと思われるものを集めて、さくいんを作りました。

二、さくいんにでているページは、この本の中でおもにでているところです。

三、太字にしてあるものは、とくにたいせつなものです。

(ア)あざらし……………九七

アジア大陸……………六五

アフリカ……………一一二

あぶらやし……………六八

アメリカ……………二八

アルゼンチン……………一三三

アルプス……………一一六

ウエストミンスター寺院……………一一八

ウォール街(がら)……………四七

ウォルサム……………四八

雨季……………七一

浮家(うきいせ)……………七二

馬ぞり……………八二

雨量……………六五

(イ)イギリス……………一一八

イギリス海峡……………一一八

イスキ……………一〇八

イスパニア……………二四

イタリヤ……………一一五

板谷峠(いたやとうげ)……………八二

イラワジ川……………五八

イングランド……………一一一

インド……………五六

インドシナ半島……………六五

インド洋……………六二

(ウ)ウエーク……………一八

(エ)エッフェル塔(とう)……………一二五

エトナ火山……………一一五

エリー湖……………三九

エンパイア・ステート……………四四

ビルディング……………四四

(オ)オークランド……………三一

欧州航路(おろしゆ)

ころろ)……………一一一

オーストラリア……………一三三

オリーブ……………一一五

温帯……………一三三

(カ)がいせん門……………一二四

かいだん状水田……………五八

海風……………六四

科学博物館……………四七

勝安芳(かつやすよし)……………二六

カナダ……………三三

かべペーチカ……………九〇

からまつ……………三三

華北……………五七

ガロンヌ川……………一二七

乾季(かんき)……………六六

がんと木……………八五

ガンジス川……………五八

寒帯性針葉樹……………九四

カントン……………七二

咸臨丸(かんりんまる)……………二六

(キ)気圧……………六四

気候図……………六一

季節風……………六一

絹の町……………四八

絹織物……………一五

金門海峡……………三一

キューバ……………七六

きりの町……………一二〇

ギリシヤ……………一一四

(ク)クライスラー……………四五

クリーク……………五七

グリニツチ天文台……………一一九

くろてん……………九七

(ケ)経線……………一九

芸術の都……………一二五

遣唐使(けんとうし)……………二一

遣唐使船……………二一

検見(けんみ)……………五二

(コ)高緯度……………一三〇

こうりゃん……………五七

紅海……………一一四

ゴート島……………三〇

高気圧……………六四

ココヤシ……………六八

五大湖地方……………三九

小麦地帯……………三七

米の三大生産地……………五五

ゴビさばく……………一〇〇

コブラ……………六八

ゴム林……………七四

コルシカ島……………一一六

コロラド号……………二六

(サ)サイゴン米……………五六

サゴヤシ……………六八

さとうきび……………七七

さばく……………一〇〇

サロン……………七五

さぼん……………六九

三大漁場……………一二九
サンフランシスコ……………七

(シ)シヤトル……………一八

シエラネバダ山脈……………三二

シカゴ……………三八

四川盆地……………五七

人造バター……………六八

自動車工業……………四三

品川沖……………二六

ジブラルタル……………一一七

シベリア……………八九

シムラ……………七三

ジャワ……………五八

シャンゼリゼーの大通り……………二四

シャンハイ……………二四

自由の女神……………四七

商船隊……………一三〇

庄内平野(しょうなひ)……………八四

へいや……………八四

中央大平原……………三五

朝鮮海峡……………二一

珠江……………五七

(ツ)ツンドラ……………九三

(テ)テームス川……………一一八

低気圧……………六四

亭子脚(ていしきやく)……………七三

テキサス州……………三五

デカン高原……………三六

デトロイト……………三九

(ト)唐(とう)……………二一

陶器(とうき)類……………一五

等温線……………九八

とどまつ……………三九

となかい……………九六

トンキン米……………五六

ドリヤン……………七〇

しんきろう……………一〇三

進行式組立法……………四一

新庄盆地(しんじょうぼんち)……………八一

人口密度……………一三三

(ス)スイス……………一一六

水牛……………六〇

水上生活……………七一

スエズ運河……………一一二

すぎごけ……………九七

ステーテン島……………四四

スマトラ……………六六

(セ)せいち……………九七

セーヌ川……………一二五

石油……………七七

赤道……………六一

ゼネラル・モーターズ……………三九

セレベス……………七七

(ナ)長岡……………八六

ナンカ……………七〇

南極洋……………一三〇

ナンキン米……………五六

南西風……………六二

南東風……………六二

難波の津(なにわのつ)……………一二二

ナポリ……………一一五

(ニ)にしん……………一三〇

ニューフォンドランド……………一二九

ニューヨーク……………四四

(ネ)熱帯地方……………五六

熱帯の家……………七〇

(ノ)農事試験場……………五四

ノース・ウェスターン……………一六

航空会社……………一六

(ツ)草原(アメリカの)……………三四

(タ)ターレン(大連)……………二四

大英博物館……………一九

タイ……………五五

タイガ……………九三

隊商……………一〇四

太平洋航路……………二〇

大陸横断列車……………三二

大陸性気候……………九九

タイワン……………五九

高田……………八五

タクラマカンさばく……………一〇四

ダグラス機……………七

タワー橋……………一一八

(チ)チーク材……………八二

地中海……………一二二

地中海式気候……………一一四

ノルウエー……………一二八

(ハ)ハイドパーク……………一二〇

バイカル湖……………九九

箱ぞり……………八一

パターソン……………四八

波止場……………一三

花の都……………一二五

羽田空港……………六

ハバロフスク……………八七

パリ……………一二四

バンコック……………七二

バンドン……………七三

パン・アメリカン航空会社……………一六

(ヒ)ヒマラヤ山脈……………六六

氷河……………一二九

ビルマ……………九八

ピッツバーグ……………四三

(フ) フィヨルド……………一二八
 フィリップピン……………五八
 フォード……………三八
 仏領インドシナ……………五六
フランス……………一二四
 フロリダ半島……………三五
 ブロンクス……………四四
 分水界……………八二
 ぶどう園……………一一七

(ヘ) 平安時代……………二一
 ベスピヤス火山……………一一五
 ベドロー島……………四七
 ベルサイユ宮殿……………一二五
 ベルホヤンスタ……………九一
 ベルゲン……………一二九
 ベーチカ……………九〇
 ペンシルバニア州……………四二

(ホ) 放牧……………一〇六

(ヤ) やしの木……………六七
 ヤクーツク……………九九
 ヤンズ川(ようすこう)……………五七

(ユ) 油 田……………七七
 遊牧の生活……………一〇五

(ヨ) ヨークシャー……………一二二
 ヨーロッパ……………二〇
ヨセミテ公園……………三〇

(ラ) ライン川……………一二七
 ランカシャー……………一二〇
 ラングーン米……………五六

(リ) 陸 風……………六四
 リバプール……………一一一
 リビエラの海岸……………一一六

(ル) ルイ十四世……………一二五

北西風……………六二
 北東風……………六二
捕鯨船(ほげいせん)……………一三〇
 ホノルル……………一八
 ホワイトハウス……………四九
 ホンコン……………二四
 ボーイングB二九号……………一七
 貿易会社……………八
 貿易港……………一二
 防雪トンネル……………八六
 ポストン……………四八
 ボルネオ……………六六
 ボルドー……………一二七

(マ) マーシー川……………一二三
 マゼラン……………二五
 マルセーユ……………一一六
 マレー諸島……………五五
 マレー半島……………七七
 マンゴスチン……………七〇

ルーブル博物館……………一二五

(レ) レーニア公園……………三〇
 レセップスの銅像……………一一三

(ロ) ローマ……………一一四
 ロサンゼルス……………一八
 ロッキーマウンテン……………三二
 ロング島……………四四
ロンドン……………一一八
 (ワ) ワシントン……………四八

(フ) フィヨルド……………一二八
 フィリップピン……………五八
 フォード……………三八
 仏領インドシナ……………五六
フランス……………一二四
 フロリダ半島……………三五
 ブロンクス……………四四
 分水界……………八二
 ぶどう園……………一一七

(ヘ) 平安時代……………二一
 ベスピヤス火山……………一一五
 ベドロー島……………四七
 ベルサイユ宮殿……………一二五
 ベルホヤンスタ……………九一
 ベルゲン……………一二九
 ベーチカ……………九〇
 ペンシルバニア州……………四二

(ホ) 放牧……………一〇六

(ヤ) やしの木……………六七
 ヤクーツク……………九九
 ヤンズ川(ようすこう)……………五七

(ユ) 油 田……………七七
 遊牧の生活……………一〇五

(ヨ) ヨークシャー……………一二二
 ヨーロッパ……………二〇
ヨセミテ公園……………三〇

(ラ) ライン川……………一二七
 ランカシャー……………一二〇
 ラングーン米……………五六

(リ) 陸 風……………六四
 リバプール……………一一一
 リビエラの海岸……………一一六

(ル) ルイ十四世……………一二五

北西風……………六二
 北東風……………六二
捕鯨船(ほげいせん)……………一三〇
 ホノルル……………一八
 ホワイトハウス……………四九
 ホンコン……………二四
 ボーイングB二九号……………一七
 貿易会社……………八
 貿易港……………一二
 防雪トンネル……………八六
 ポストン……………四八
 ボルネオ……………六六
 ボルドー……………一二七

(マ) マーシー川……………一二三
 マゼラン……………二五
 マルセーユ……………一一六
 マレー諸島……………五五
 マレー半島……………七七
 マンゴスチン……………七〇

ルーブル博物館……………一二五

(レ) レーニア公園……………三〇
 レセップスの銅像……………一一三

(ロ) ローマ……………一一四
 ロサンゼルス……………一八
 ロッキーマウンテン……………三二
 ロング島……………四四
ロンドン……………一一八
 (ワ) ワシントン……………四八

マンハッタン島……………四四
 満州……………五七

(ミ) ミシシッピ川……………三四
 南アメリカ……………二四
 南支那海……………六二
 南半球……………一三三
 ミドウェー……………一八
 ミンダナオ……………二五

(ム) 室町時代……………二四

(メ) メキシコ暖流(だんりゅう)……………一三〇
 メコン川……………五八
 メッシナ海峡……………一一五
 メナム川……………五八

(モ) 蒙古バオ……………一〇七
 最上川……………八一

先生がたへ

第六学年用として「この国あゝの国」「進んだ交通と通信」を編集しました。

そのうち本書は、つぎの諸点を考慮して執筆してあります。

一、第六学年の児童は、その経験の範囲を世界にひろげて、より深い理解を得ようとする欲求と興味とを深くもっていると思われれます。この欲求と興味とをみたして、その生活を拡充させることは、また、社会的要求でもあります。

かかる見地から、児童生活の現実になつて、とくに、わが国と関係の深い世界各地の生活に取材しました。

二、しかし取材の範囲は、現在とくにわが国と関係が深く、そのうえ、児童の興味や関心の強いと思われるアメリカやアジア、ヨーロッパの各地としました。

もちろん、問題によっては、これ以外の土地にも、発展することが考えられましょう。その際は、学校の事情に応じて、適当な資料を集め、その解決に、つとめていただきたいと思ひます。

三、本書は、また、中心人物の春雄、ならびにその友だちを活動させ、学習の具体的展開をこころみることによつて、民主的な生活のし方を会得させることにもつとめました。

児童はこの書を読むことによつて、ますますその経験をひろめ、また、学習の方法を会得することでありましょう。しかし、教師においては、つねにわが国との関連を考慮してとりあつかうことをわけてはならないと思ひます。

四、文章は、平易をむねとし、新かなづかいと教育漢字とを用いましたが、特別の用語は、当用漢字を用いて、ふりがなをつけることにしました。

五、児童の興味をますとともに、その理解を深めるため、図版などを多くとりいれました。しかし、もちろんこれで、じゅうぶんだとはいえません。とくに、移動的な統計や分布図は、その取扱いに留意していただきたいと思ひます。

Copyright 1950, by
The Gakkō Toshō Kenkyūkai

All rights reserved

The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小社 602

社会科 第六学年用

この国あの国

Approved by Ministry of Education

(Date 1950)

発行所	印刷者	発行者	著作者	昭和二十五年 昭和二十五年	表紙	編者
東京都港区芝三田豊岡町八番地 学校図書株式会社	東京都港区芝三田豊岡町八番地 印刷株式会社 代表者 川口芳太郎	東京都港区芝三田豊岡町八番地 学校図書株式会社 代表者 川口芳太郎	財団法人 学校図書研究会 会長 森岡文策	昭和二十五年 昭和二十五年	高橋正人 田北岡伊 さしえ 木川秀雄	広島市東千田町 広島高等師範学校附属小学校内 藤部充忠 伊部好雄
				月 月 日 日 印刷	発行	
					定価	
					円	

本書の指導書・ワークブック・註釈書並びに
これに類する一切のもの無断発行を禁ずる

広島大学図書

広島大学図書

0130449984

